WASON
HQ
1104
J74+

Nov. 1897
no. 453

明治三十年十一月十日

女學雜誌

第四百五十三號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百五十三號目次

◎口繪
入相の鐘　獨乙詣伯ラウプ氏筆

◎社說
實際の着眼◎政論家は相撲取の如し

◎家庭
爐邊閑樂
水の恩かへしがたし◎土藏の火の用愼◎小話二則（治家の良策）一商人の商政）◎闘ひ者家を破る

◎講義
菊の話　曲汕

◎史傳
今昔夜話　山下石翁

◎文藝
女子武道の極意　松本愛子氏談
戲曲評釋葛の葉子別れ　かも子

◎兒鑑
紅葉のにしき　よし子

◎隨感
◎學を誤り易きの嘆◎實に無常なり◎月夜の感謝

◎雜錄
海舟翁近詠
陸奥だより（上）　美颿
入相の鐘ゑさき　よしの女
冬季の美食品◎廿諸料理（三）

◎時文
日本現時の社會問題◎栽授新教授法要書◎春陽文庫◎新小說第十二號◎各宗高僧ものがたり

◎片々◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や簡易實際な事にし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

◎單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば其望に應ずべし

女學雜誌定價表

前金

壹冊價　金拾錢
半年前金　金一圓拾錢
一年前金　金貳圓
（內國無郵稅）

代金は凡て前金の事◎前金切れの節は封皮の捺印に御注意の上早速御送金有るべし

廣告料

一行一回（廿七字詰）前金十錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引

送金

爲替は東京本郷駒込郵便支局に宛て小爲替にすべし（○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ふべし）

明治廿七年二月十九日內務省許可
明治三十一年十一月九日印刷
明治三十一年十一月十日發行

東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚六百六十番地
發行兼編輯者　巖本善治

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十六番地
印刷者　島保藏

東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工塲
（電話本局十九番）

女學雜誌出版書目

櫻井成明譯　**腓立比物語**　正價金二十八錢　郵稅金六錢

巖本善治著　**教育講義**　正價金七錢　郵稅金二錢

橫山雅男著　**婚姻論**　正價金十二錢　郵稅金四錢

中島湘煙女史著　小說　**善惡の岐**　正價金十七錢　郵稅金四錢

阿波鳴門左衞門作　戲曲　**桂吾郎**　正價金十錢　郵稅金二錢

巖本善治著　**吾黨の女子教育**　正價金十錢　郵稅金二錢

若松賤子英文集　**巖本嘉志子**　正價金六十錢　郵稅金六錢

布川靜淵、小此木秀野合著　**俳諧史傳**　正價金二十七錢　郵稅金四錢

鈴木弘恭述　**百人一首講義**　正價金二十八錢　郵稅金四錢

同　**文法口授**　正價金十二錢　郵稅金二錢

小公子　定價金三十五錢、郵稅八錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎……錄

◎時文

◎月々 ◎閑話

發行兼編輯人 巖本善治

印刷者

發行所 女學雜誌社

印刷所

文法口授

小公子 定價金三十五錢、郵税八錢

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治三十年

菊の花を評するは

女學雜誌

第四百五十三號

明治三十年十一月十四日發兌

社説

實際の着眼

車轔々、馬嘶々たる何事の爲ぞ。人皆な自から思へらく、治國平天下の急務の爲に斯の如く繁忙なりと。抑も天上より之を任ぜられたるにもあらず、百姓より之を委賴したるにもあらねど、切りに躬から感慨する所ありて則ち斯の如しと云ふ、眞に殊勝なる事と云ふべし。

凡そ、今の忙々焉として國事の爲に奔走すと言ふ所の名士は、皆な衷心激する所ありて起てる也。其の誠意に於て如何ぞ先後あらんや。銘々皆な惟へらく、我は愛國者なりと。たとひ、衆の之を許するを倘ほ淺しとするも、吾人は當該名士が自から任ずる所の深きを疑ふことなし。其の情を以て言はゝ、皆な愛國者たることを失ふべき族にはあらず。

左れど、若し、心を平らかにして審びらかに思ひ、其の淡然として敢て他を見るの批評を自己の身上に翻へし來らば、凡そ一般世人が我を目して何とか看做するやの消息を察するを得ん。我にして此事を成就せざれば國家は則ち危しと迄で思惟する時、躍る者は依然として躍り、舞ふものは依然として舞ひ、醉ふものは依然として醉ひ、鳥は樹梢に歌ひて地震はず、魚は水中に泳ぎて泉源滾々たり、四面の光景毫末の異なきを觀ずらん。嗚呼、夫れ、愛國者の預言者的警戒は大率空言なる乎。

試みに、聞け、維新以來、政論の喧しきこと幾何ぞ。而して、政論の結べる實は果して何ものぞ。政派、政黨の離合、掌の向背よりも速かなり、而して其の與へたる實益は何事ぞ。其他、諸種の政治論より、諸種の社會改良論に及び、更に宗教、教育等に關する諸種の慷慨論に至る迄で、其聲を聞くことの甚だ高くして、其の實際の極めて微なりしもの、多からざ

るを得し乎。自他ともに精に念慮せば、思ひ半ばに過るもの決して少なしとせず。

夫れ、其の實功の薄きによりて、其の誠心の足らざるに由ると概論するは當を得ず。然し乍ら、其の識見の卑く、其の伎倆の拙なかりしに由ると言ふものあらんに、誰か能く免かれんや。左れば、詮ずるに、極惡もなく、極善もなく、何人の悪しきに由るにもあらず、誰れの奮發の足らざるにも由るにあらず、但だ只だ其の見込の屆かざるによりて不首尾の結果を得せしむること頗ぶる多しと知る。抑も誰をか責めん。但だ賢からざるを責んとする耳。

然りと雖ども、人は、眞面目の誠意の足ると足らざるとに由りて、太甚しく、其の識見を上下す。論者往々、才を以て識の高下に由縁するとの最大なるものとなせども、之れ甚しき誤まり也。識の明暗の才によらんよりは、誠の有無に由らんこと甚だ多し。才によるものは、識の幾分を買ひ得べきが如くして實は達せず、かの誠に由れるものゝ、遂に能く徹底するに及かざる也。誠あるものは、事物の眞髄を看破し、才あるものは、只だ其の運用に着眼す。此をもて、才子暫らくは鋭敏の觀あれども　遂に能く精神に入らず、大機に臨みて之を逸し、大事に際して之を誤まる、もと皮相の運行にのみ耳目を奪はれ、其の眞相に通ぜざれば也。

此故に、人は生平其の衷情を洗濯して、誠意の泉を清くし、以て赤心流露の部面を開拓すること深厚ならざる可らず。斯の如くすれば、事物に接する都度、其の奧深く、底深き所に浸潤竄入して、皮相浮薄の所に上走りするの輕躁あるなし。則ち、實地實際の神に入るの方なり。

人既に此の敦厚の氣象を養ふ時は、着眼自から實際に、抱負自から實地にして、決して、無益の奔走に流るゝことあるまじ。學に臨みては、躬から責め、史傳に對しては、近く考がへ、當世に盡しては、實際に工夫し、事業を撰みては、質實に採り、他の囂々者流が、單に浮評嘖々たる方にのみ狂奔せんとすると同日の比にはあらじ。

惟ふに、方今の憂は、名士、實際の着眼に疎なるの一事か。然りと雖ども　是れ今來古往つねに同日の類なりと言ふものあり　單だ廣く歎くことを止めて而して先づ自から責むる則はち實際の急務に非ずや。

政論家は相撲取の如し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

政論家は相撲取の如し

西洋にて、租税を出すものは發言の權ありと云ふを絶對の金言と聞做し、万口一齊に政事を議論するを善き事の樣に思ふ人の多きは詮なき義なり。社會整理の絶頂は、國人が餘り政治を氣にせざるやうになる時にあり。支那にては、之を堯舜の政治と言ひ、西洋にては、之を自治政治と云ひ、同じく其の理想とする所なり。幸ひにして此の理想に近づく時は、政治は畢竟、申合せの事務を取扱ふ迄にて、申さば一種の俗務に過ぎず。要とする所は、其の手續と、其の處置との敏活に且つ入費少なく行はれんとを希望するにある耳。此時に當りて政論家の功用なるもの果して如何。

凡そ舊調子を一變して、新らしき模樣換に移らんとする時に際しては、外國又は古代の事例を研究して方今の參考に供すべき必要あり。此に於てか、政理政法の翻譯討議の入用なると出で來て乃はち政論家なるものを生ず。我國近代にありては、維新以後國會開設に至る比迄、連りに此の發生を促す可き時期にてありき。

左れば、政論家本來の事業は、譯述、討議の類にて、詮ずる所、一種の學者もしくは口舌家に過ぎざる筈なり。草の葉を研究する植物學者、虫の尻尾を吟味する昆虫學者と元と同格に列し、只だ勉強して學論に執心すべき者に外ならざれども、抑も其の研究する所の事項が實地の政治と關係すると太はだ近きの故をもて、政論家は動もすれば、政治家の如く自から抱負し、人も亦た誤認し、天下遂に之を混同するに至るとあり。此に於てか、政論家の一向一背をもて直ちに邦家政務の吉凶に關するものゝ如く速了し、大きに心配する者もあり。既に心配するものあるが故に政論家も亦た甚だ得意を見めして、驕然として自負するもの多し。識者もし之を觀ば噴飯に堪へざるとなるべし。

政論家往々言ふ、納税者は發言せざる可らず、然らざれば暴政あらんと。然れども、暴政は到底行はれ得べきものにあらず。發言して之を否むとの有りや無しやは畢竟問はずして可なり。たとひ衆議の制度なき專制國にても、納税者をして至當の納税なりと納得せしめざる徴税の遂によく行はれたる例あるとなし。亦何ぞ政論家の喙を挿はさむの一事を須要とせ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

んや。たとひ、政論家の囂々たるものありとも、彼等が不知案内の故によりて暴りに決議したる納稅法は、偶ま不當の徵稅にすら義の名を得させたるまでにて、寧ろ初めより其の協賛なかりしに及かざるとあり。單に政論家ありと云ふの一事、何んぞ必らずしも文明の政治に必要なりとせんや。

夫れ政論家の實際の品格價値もと斯の如きに過ぎず。然るに、尙ほ植物學者、昆虫學者等に優りて人の喝采止まざる所以のものは何故ぞと言ふに、他なし、彼等が論ずる所の事項は即はち衆愚の尤も多く注目する所にて、畢竟人の目のつき易き舞台の上に立ちて高く叫ぶが故と知らる。役者は河原乞食と言はれたる程なれども、種々に化裝して人の喝采を博すべき舞台の上に立つをもて、是非の評判を受くると他の尋常の職業に異なる。政論家の仕事も亦た別格の價値あるにあらねど、人の目につくとの多きによりて評判嘖々たり。況んや、其の一呼一叫は大抵討論の氣味を存し、つねに相手と競爭するの姿なれば、競馬玉投などにすら熱心する世上見物人の注意を惹くと更に多し。此に於てか、政論家の取組は猶ほ相撲の如し、其の勝負を氣にして夫々に贔負のつくは勿論の由縁と知るべし。

此の故に、今の新聞紙が、本場の勝負を電信にて急報すると同一の筆法をもて、今の政論家の一擧一動を精細に記述するは、讀者の愛讀を望めば也。讀者の之を愛讀して彼是の評判となすも、其の一興なるべし。然るに、政論家たるもの、其の本來の面目を忘れ、我こそ國家の治亂を双肩に荷ふなれと自負して、大切の愛嬌を失却するに至りては、其の評判も既に末なりと知るべし。又、堂々たる青年有爲の才、本來他に天稟の職受あり乍ら、一種の浮氣に乘じて水商賣を好み、今よりしてわざ〳〵政論家とならんとする耳ならず、政論家の眞價値をも辨ぜずして只管ら之に醉はんとするに至りては、眞に氣の毒の事なり。願はくは人々本氣の眞面目に反りて、質實實際の家益、國益に盡瘁し、餘力を以て文に從ひ、餘暇あるとき相撲取や政論家の評判にも打興ぜんこそ願はしけれ近年は追々政論家の下落を促し來りたるに、今や機少しく轉じて、又もや政論家流行の年月暫時勃興せんとす、此に於てか少些さか警言を呈せざるを得ざる也。

爐邊團欒

家庭

客舍のともし火

家庭

爐邊團欒

赤き火の色親しまれて、爐邊の物語戀ひしき時節とはなりぬ霜がれの小草、風にさびしく、落葉、行衛を失ひて獨木の悄然たる景色など眺むれば、世の哀れも今更の如く感懷せられけり。

都門に遊學せる田舍の書生は、膚さむく、衣うすきを感ぜし初めてより、鄕關の藁屋に遠慮なく燒火せし比を懷ひ出し、爐邊に父母の膝を枕にしてウツラ〱其の雜談を聞きつるゆかしさも亦一入なり。熾んに燃上りし火の氣色、出入下男が顏を眞赤にする迄で温まりて高笑いし、下女が流し元に片付ながら合づち打ちて興じ笑ひし光景など歷然として眼中にあり。下宿屋の當てがひし小さき火鉢に覺束なき火をかき立て、もしくは塾舍の規則に直ちに火を用ゆると出來ずして袖を丸めて寒さを追はん人々は、田舍の冬景色を慕ふの情一段なるべし。

客舍のともし火幽けくして、火鉢の傍に吾一人ションボリと座し、隣室の客果して何人なるかを知らずして、孤燈の下に故鄕を懷へば、今にして最先に感じ出づるは爐邊の和樂なり。其火は春の火の花咲く如く、其の温かみは祝福の手の抱くが如く、其のにぎやかさは一家忽ち花宴に醉へるが如し。懷ひ起して之を考ふれば、思ふにだに若やげる心地して、天地の寒寥なるを忘れまくす。爐邊の與へし紀念も亦た有力ならずや。

凡そ有用の用を知るものは多けれども、無用の用を辨まふるものは少なし。活動の功力は覺りやすけれども、團欒遊樂の眞價値を察するものは多からず。然し乍ら、人は夜寢ねて其躰を長養するとひとしく、互ひに遊樂して人事の過半を辨じ得べきものを、只徒らに忙々役々として初めて能く其事を成就すと誤解する人の多きは痛ましき事なり。人生の用務は逸居談笑の中に遂ぐべきもの極めて多く、亦此の中に於て開發し養成し守護し發達せしむるものも、亦太はだ多し。然るに働くものは只だ働くことを知りて餘裕なく、遊ぶものは遊び

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の主旨を辨ぜずして只徒らに、之に耽るものから、同もに双ながら誤りに入る、歎ぜざる可らず。

第一に申すべきは、子供等が適當に發達せんには、兩親たるものに逸樂の餘裕なかる可らざると也。父は外事に忙はしくして其兒の遊び相手となる暇もなく、母は家事に世話しくしてロク〱其の甘え言葉を聞くとも出來ざる時は、兒等の圓滿として福々しき發達を見んとは覺束なし。只一槪に嚴格を氣取る家風にては、子供の甘えるを邪惡の如くに見做せども、そは子供の性質を辨知せざる無學の致す所也。適當の處迄は、甘えさせ、程好き所にて制裁するは、天が春と冬とを同年に下すの敎育法たり。動物より進化して天使たらんとする人間の敎育には、決して此の容赦を禁ずまじきもの也。故に、父母の双方ともに、或る時は秋霜烈日の威嚴を以て之に臨み、もつて其の我儘を制御するの必要もあれども、そは變にして常にあらず。成るべくは之が遊び相手、話し相手となりて、子供をして無二の好伴侶を得たる心地せしむべし。之れ聰慧にして敎育ある父母が其子を敎養するの方なり。左あらんには、父母たるもの、其の日々の仕事より幾分の餘暇を割

き、之を逸樂の時間とし、悠々として其兒と同遊すべし。之を最良の家庭敎育とす。かの名士の子に賢兒なきは、其父あまりに世話しくして、殆んど其子と談笑するの暇すら無きに由緣すると多し。

第二には、家內の奉公人又は食客、かゝり人の類をして、主人夫婦に親しましめ、其の思ふ所、欲する所、鬱勃する所を發表せしむる爲に、家庭に於ける逸樂の時間を要す。中には呼出して嚴かに告白せしめんとするものなどもあれど、斯る塲合に於ては其の眞情を露はすものにあらず。所云る談笑雜言の間に機微を示し、思はず心中の秘密を現はすが、遠慮すべき地位に服しつゝある人の常態なれば、主人夫婦たるもの時々悠然として躰ゆたかに心閑かなる遊樂の時を置き、彼等と膝ちかく笑ひ與ずるの塲合なかる可らず。斯すれば威嚴を墜すなど言ふものもあれど、斯して威嚴を落すほどに實際の品格なきものならば、既に內實は何の威嚴もなく、只表面に虛飾の服從を買ひ居るのみ。表に尊敬せらるゝ如くして實は侮蔑せらるゝほど威嚴なきはなし。威嚴の生ずるは、實地の品德に由るものゆゑ、斯る親しみによりて、之を失ふなど〻

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

思ふ勿れ。

第三は、遊樂其もの丶爲に遊樂せざる可らず。如何なる家庭にでも遊樂はなかる可らず、之れ人間本來遊樂を欠ぐことを得ざれば也。もし表面何等の樂もせざる如く見ゆるものあらば、そは人の知らざる所に忌はしき抜目を造り居るなるべし。左れば、人は到底遊樂するものと勘辨して、之を公けにし、之をもろともにし、之を清潔にし、之を無害有益にするより肝要なることはなし。家庭團欒の遊樂の如きは乃ち之れにあらずや。家庭の遊樂には不潔の分子なし。其入用は自から少し。其の結果は言ふ迄もなく尊貴なり。

而して、此の逸樂を取るの方、冬に於ては爐邊の團欒に及くものはあらず。柴を折りくべて火を祝し、茶を沸かして心を温たかくし、平易に相對して氣置なく談笑すれば、福神も近づきて仲間に入り、煤の塵も欣喜して舞ひ躍るに至る。寒夜の爐邊は實に祝福の豊なる所なり。

閣中帝子今何在、檻外長流空自流　　王勃

水の恩返しがたし

癇癖強き女の兒のありけり。手を洗はんとて水を酌むと夥だし。いつも川の如く流しけり。母なる人の曰はく、親の恩は返すことを得べし、水の恩は返しがたし、一旦いたづらに棄てたる水に對して如何かして報恩するぞと。其兒ふと感激し、之より復た亂用せず。ことし其兒六十の老婆となり、慘として懷舊のものがたりして吾に語りて曰へらく、此時より甚だしく水を用ゆることを愼しみたるおかげにや、五十年間かつて水に不自由せしことなしと。味ひある知言なる哉。

土藏の火の用愼

冬の用心は火事にあり。火事の用心は土藏にあり。土藏に品物を入れるには、成るべく二階に多くあげ、下はあける樣にすべし。万一の時、下に急に入れべきもの丶多くあるべければ也。二階にても、下にても、品物の置きやうに心すべし。簞笥にても、周圍に通りをあけ、壁につけぬやうに置く也。此の周圍の通り路の方に引出しを向けるなり。棚も、壁につ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

けず、宙につるすやうにすべし。火災の折、壁につけて入れ置けば、内より火を發する患あり。火を發せずとも、多く傷むものあるべし。

大掃除

大掃除は十二月の末になすものとのみ思ふ可らず。こは止むを得ざるものゝ爲すことなり。成るべくは此の十一月中に爲し置かん方、心やすし。十二月となりては、何事も世話しく、人の心もさわ立て、惣べて鄭寧には治めがたし。

小話二則

ちやうてい

◎治家の良策

柳里恭の雲萍雜誌に曰く、

或侯十万石を領しながら、困窮せられしころ、大阪にて豪富の町人、その侯のまかなひするに、すべて儉約を以て專

毎に十万石を斂さん、左あらば、日々をつめずとも、大名の家計、何ぞ町人の財を借ることを用ゐんやといへば、某、淮々として謝り[illegible]。

とするとて、家來の祿をへらし、諸事の入用を減じて、上向よりはじめ、粗食して、下みなこれにならひ、なほ諸家のつき合をも省きたり、かゝれば家中いよ／＼ひがみ、下ます／＼いやしくなりゆき、收斂盜臣いよ／＼增長して、窮迫はむじめにいやまし、何某その仕法を憂ひて、予にこのことを歎きけるに、予こたへて云、物本末あり、事終始あり、終にすべきことを始にして、後に致すべきを先にする時は、ます／＼惡しきは盛んにして、善事かくれ、家國の經濟における私欲のうすくして、誠忠なる者を分けてえらみ、衆人心をあはせて、徹の法を行はゞ、いかほど困窮し給ふとも、年を追ふて、富まさんと改めいふべきに非ず。賄はせて利を得んとするは、民と利をあらそふなり、國家を治むること古よりして云ひ傳ふるがごとく、奇字の謎の意ばへあらまほし。この文字をわくるときは、上に立んとすれば下可ならず、下可ならんとすれば、上立たず、家を治むる法まづ損じたるところを修覆して後、おひ／＼かたむけるを起すべし。十万石の領中、一万石をなきものとして貯へ、九万石を以て家法を立るとあらば、一年に一万石、十

年に十万石を餘さん、左あらば、日々をつめずとも、大名の家計、何ぞ町人の財を借るヿを用ゐんやといへば、某唯々として歸りぬ。

◎奇字の説甚だ妙なり。二宮尊德翁の仕方もまたこの事の外ならず。大名の家計も、町家の家計も何ぞ異なるヿあらんや。而もまたこの仕法の古へを今に斟酌せば、一家の經濟を整理するの良策あるを得ん。

◎一商人の商政

一豪商あり、主人はじめ、番頭小僧の外下女下男に至るまで相輯睦して、いづれも主人大切、商賣大事と心掛けざるはなし。そも如斯きを致したる所以の秘訣如何と尋ぬるに、日々三度の食事には主人以下悉く、一坐に居並びて、同様の食物を股つヿと定めしに、この隔てなき主人の取扱ひ心は、一事が万事に亘り、雇人一同其志に感じて、其行ひあり、爲めに主人の商賣は、いよ〱盛んなるを加ふるのみとなれりとぞ。前々號に見えたる江州商人紅定氏の商道と共に、併せ稱すべきの逸事なり。

圍ひもの家を破る

家に讎敵を養ひ、膝近く互ひに嫉妬せしめ、出入奉公人に至る迄でを二つの黨派に分らせて、我れから家を破らんとする不處存も、はじめは一夫一婦の天則を忽諸にする肉慾の致す所なり。色に迷ふと云ふ其の色は夜叉の相貌なり、如何して麗しきヿのある可きぞ。もし又眞に之を憫れむとならば、之を怨恨痛罵の日かげに圍はず、速かに公明白日の身に直らせて、其の一生を幸ひにしてやるこそ雄々しけれ。左るを當座の涙に心をとろかせ、見末のつかぬ無分別に晝又夜をくらして、遂に抑も、如何せんとするや。近來の紳商名士など云ふものに家庭の調ひたるは少なし。其の少なき大元因は家に忌はしき一個の他人の同住すれば也。もし又之をうるさしとして別の家に圍ひなぞすれば、主人が用事ありての外出も家人の信用を受るに堪へず、折々はイヤミを聞くこともあるべく、イヤミならずとも、我がヒガミよりイヤミとも聞くなるべし、人は我身勝手のものゆゑ、之にいよ〱不平を起して家を外にする正當の理由となし、偶ま家に歸りても、何とか

申し出させまじとて苦り切つて居るなるべし。子供はさすがに母に氣の毒がりて母の加勢を爲し、頑是なくも子供ながらの不平を示して、父の言ふことに服從せねば、父はいよ〳〵威嚴を冒さるゝ心地して、いよ〳〵苦がり切り、些細の事にも叱り飛ばして、其の腹立まぎれに家を出づると云ふ躰裁を、裝ふなるべし。

夫れ主人の不心得は言語同斷の事なり、必らずしも辯護すべき餘地とてはなけれども、人は如何なる時にても他を責めずして自から責むるを殊勝なりとす。ましてや、人の妻となり、子の母となりて、優しき心掛のあらんことを第一とすべき閨人の身にとりては、神に祈り、佛に願ひ、心にもとめて、只管に夫の身持の直らんことを望み、其の責を一身に引うけて毫も怨恨不平の心地あるまじきと也。淨瑠璃に「妾しと云ふものないならば、半七サンの身持も直り、御勘當もあるまいに」と云ふ愁歎あり。語は野卑なれども、貞女の赤誠を吐き出して遺憾なしと云ふべし。

左れば、夫は夫として躬から責むるの塲合あるべし。此は暫らく別事として、コナタより口を挿はさむの要ある可らず。

先づもつて婦人自から心に責めて思ふべし、男子家庭の樂しみに滿足せずして不潔なる肉樂に溺るゝと云ふと、第一には家庭の滿足にあき足らず、妻の誠心に感動せず、何處にか不足を恨みて遂に此放蕩あるに至りしならんと。人ありて曰ん、夫は必らずしも妻の不束なる故にあらず、元來他人にさそはれて浮と遊び、遂に其の惡習に染みしなりと。然し乍ら一朝一夕の迷ひに溺れて、久しく其の羇絆より脱しがたしとならば、必らずしも附合の爲め斗りにあらず、假そめの迷ひとのみ言ふべからず、矢張り一種の美にひかされて戀々たるならん。左れば彼方に引つける程の引力にまさりたる引力の此方にあらば、元來心には疚しと思ひつゝある丈夫の心を此方に轉ばせんこと難しと云ふ可らず、畢竟は吾が愛の足らざる故と勘辨せざる可らざるにあらずや。然るに又人ありて難ぜんとす、たはれものゝ常として巧言令色を事とし、少しも後の爲めを思はず、只管ら目前の榮華をきらつかせ、たゞ〳〵面白可笑しくもてなすの故に、窮屈なる妻のお爲思ひの無趣味に比ぶべくもあらず、男はもと阿房なるものゆゑ、知りつゝも欺さるゝほどの有頂天にはなり易き上に、眼前に此の遊樂

ありて、ワイ〳〵尤に帮るゝに至るもの也。家の妻は、身代を外にして遊興せんや。
も大事にし、子供の行末も思へば、かのたはれものと競爭し

ありて、ツィ〳〵夫に浮るゝに至るもの也。家の妻は、身代も大事にし、子供の行末も思へば、かのたはれものと競爭してたゞ〳〵夫の心を喜ばせんとは出來まじき筈なりと。」然し乍ら、尚ほ覺悟の足らざるとあり。妻と言へば、四角四面に手をつかへ、お家大事と留守番のみし、やゝともすれば、夫に直諫して、今にも短刀直入の苦言を呈すらんと見するを貞女と心得、其間少しの餘地もなく、洒落もなく、趣味もなく、美の風雅もなければこそ、横着なる男子は理屈をつけて餘處に遊びありくに至るものなれ。妻は諫議大夫にあらねば、彈劾、直諫の一本鎗をのみ功名とすべきにあらず、終生の伴侶、一生のお友だちなれば、眞面目の奉公は言ふ迄もなく、面白味と、餘裕とは元より無る可らざる筈なり。たはれもの〻慰めは面白きやうなれども、ひつこくして、いつ迄も男子の心を悦ばすに足らず。名たゝる放蕩家の告白する所を聞きても、不潔もの〻媚びへつらふを内心よりうれしく思はぬやうになるは暫時の事なりとぞ。妻たるものにして少しはあかぬけしたる慰めと、大悟したる面白味と、清楚にして潔き愉快とを與ふることあらんには、男子たるものいつ迄か家を外にして遊興せんや。

扨て、男子一たんの迷ひによりて、外に忌はしきものを圍ひ、當分は之に迷ふと雖ども、暫らく立たば後悔の機自からにして生ぜん。左なくとも、妻が殊勝なる獻身、如才なき氣轉、一向に恨み氣なき洒落の待遇等に接するときは、頭上熱火を積まるゝの思ひして、冷情次第に燃え、翻然一悟して、扨て〳〵悪かりしと思ふにつけ、情ある男子ならば、只管ら、かの關係せし女の身の上を氣の毒に思ふなるべし。

此時に方りては、妻たるもの亦率先して其の救ひに任じ、暫しなりとも吾が夫の愛顧せしものをたゞものと見做す勿れ。此期に及びて、怨み返報などせんと思ふほどの、ケチなる根性にては、其身も亦た一生のうちに悲しき目にあはん事必定なり。女氣も亦た男氣に優劣なければ、義俠のもろはだ脱ぎて潔白の始末をつけ、彼の女に申分なき結末を得させて、立派に身を引かすべし、假初にも執念深き忌味を毫髮のサキほども出すべからず、天地鬼神をして感泣せしむるほどの潔白あるべし。左すれば、其后一生の祝福豐にして、天幸其の家庭に下り、伉儷のまじはり長久に盡きざるべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

講義

菊の話

長汀子

凡そ一年の花暦は、春早き、雪間に咲ける梅の花の、いづれをそれとわけかねしより、やがて櫻の霞遠近にたなびく頃になり、三千とせちぎる桃の花、岩がきつばた、唐人の花の王てふ牡丹、井手の山吹、松にかゝる藤波、月影まがふ卯の花垣、籬に匂ふ薔薇、花橘の昔しのばする、さ月のつゝじ、瞿麥のなつかしき、夕顔の眉、露にひもとくさゆりの花、濁りに染まぬ蓮、萩、薄、女郎花、露の朝がほ、秋野の八千草、いろ／＼に咲きみだれたる、みなつぎ／＼に、おのがじゝ時にかなひて咲き出でたるその後にこそ、秋もやうやう暮れなんとして菊の花の八重一重九重にさへも匂ふなれ。一年の花菊に至りて盡く。されば昔菊は蘜と書きて、鞠窮とて逼まり盡く事の意をあらはしたりともいへり。菊に伴ふに、二月の花よりも紅なる紅葉のありて、人いたく愛づるも、こは花ならねばいかにせん。朗詠にも

不是花中偏愛菊、此花開後更無花　元稹

と見え、此時の意味を酌みてや、源三位頼政もかくなん。

木がらしの風のたつまで綻びぬ菊こそ花のとゞめなりけれ

◎賞菊の由來

我朝菊を賞すると支那より傳ふ、菊其者も彼國より渡來して、これには國音なくて、依然キクの字音を用ゐならしたるを見ても、さなると明かなりとは、一般の說なれども、或人はまた別に說をなして、菊は元來固有の草花にて、花の形くゝりたるが如きより、クヽといひしが訛りてキクとなりたるなどいへり。いつれか是なるや、これを知らず。されど思ふに、菊なるもの、太昔にも、今の如き美しきならぬ、野生の小さきものありしならん、志かれども、人多く之を賞せざりしものが、平安朝時代の、太平文弱なる、公卿上流の人士は、かの歌合、貝合等のみに飽きたらず、艶詞合より、花合、前栽合または根合などいふをかしき閑散事を、人と共に樂しんで、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

興宴に時を費し頃、この菊もまた合せもの丶中に入り、菊合なども初まりて、之を賞せしかば、珍しきを競ふが物合せの性質とて、異種を作り出し、また珍種を支那より取り寄せたるが、廣く、後の世に行はる丶に至りしなるべし。

菊を賞したる歌、万葉には見えず、宇多天皇の寛平年中（去今一千餘年）にはじめて菊合の事ありて以降、菊を賞すると初まれりと舊紀に見ゆ。其後の帝の世にもをり／＼菊合のありしと史に出づ。

醍醐帝の延喜年間に成りし古今集には既に多くの賞菊の歌見ゆ。此集以後、いづれの歌集、打聽にも菊の歌あらざるはなし。而して一條帝の御世には（去寛平百餘年）四納言の一人と呼ばれて、和漢朗詠集の編者なる大納言公任は宇治關白賴通と春秋の花の優劣を論じて、宇治殿、春は櫻を以て第一となして、公任と爭ひし、故事あり。清少納言も、草花中にて、菊のところ／＼うつろひたるなどいひて之を賞せり。且又、かの寛平以來、支那の古俗を移して、朝廷よりはじめて、重陽または重九の節句とて、群臣を召して酒を賜ひ、菊に寄せて、千歳の齡を壽き、なほ十月五日には殘菊の宴とて行はる丶とあり、民間にも亦この風擴れり。また維新前までは、菊雛とて九月九日に雛祭をなせしと彌生の節句の如かりしのみならず、前の雛よりも、後の雛の盛んに持て囃されし時節もありき、扨て、今我朝賞菊の本統たる

◎支那の賞菊故實

をいはんに爾雅、禮紀等の上世の書にも、菊を賞したるよし見えて、彼國の賞菊は既に久遠なるを知るべし。山海經には女几之山、其草多菊と載す。而して支那人は古俗、菊は目出度きものと稱へて、其露を吸ひ、其葉を食へば、病を拂ひ、齡を延ぶるものとなし、南陽縣の菊水、其下流を汲んで、人其齡を延ぶるといふ奇説あれば、また、慈童といへる仙人は菊を愛して命長かりしともいひ、名山記には道士朱孺子なるもの菊草を服して、雲に乘じて天に昇れりと記し、劉生丹の神法には白菊の花汁と蓮花の汁及楮の汁とに丹を和して、之を煎じ、之を服すると一年なれば、壽命百歳なるを得ともいへり。菊の異名に延年、輕身、仙家子などいへるあるは、此福瑞あるによれり。この支那の古傳を習ひ來りて、我邦にても菊は千歳の菊、老せぬ色など、歌にも讀て、既にかの古今

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

集の昔にも、

露ながらをりてかざゝん菊の花
老せぬ秋の久しかるべく　　紀友則

といふ歌も見ゆ。重陽の節句といふも、支那古來の民俗にして、崔實の月令には九月九日可採菊花とあり、其朝廷にもこの覩賀ありて、九月宮掖争採菊花といふ詩もあり。屈原はこの菊を愛して、

朝飲木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英

と詠じて、蘭菊を隱逸の友となせり。陶淵明は最も菊を愛したる人なり。其詩には、菊を詠じたるもの頗る多く、既に歸去來辭にも、三徑就荒、松菊猶存といひ、或は採菊東籬下とも唫じ、或は頽齡を制すとも賛し、又た

秋菊有佳色、裛露掇其英、泛此亡憂物、遠我達世情

と詠ず。五柳先生愛菊の志以て見るべし。唐宗以後詩客文人の菊を詠ずるもの、いづれも屈原、陶潛の遺意を述ぶるに過ぎずして、蓮を愛したる周茂叔も、菊は花中の隱逸なるものと評せり。百花中、梅の風骨、蘭の清香、蓮の潔姿、菊の幽芳あるは、人の中に、君子仙客あるが如くに賞翫せらる。

扨て、

◉我朝の賞菊

の由來は既に前述せるが如くなるが、之を賞すると、全く支那の俗を受けたるに過ぎず。志かして其芳香、九重の奥に達して、菊は帝の御紋ともなれり。而していま古今以後の歌人が菊花の詠を、少しく取り出でゝ、之を左に示す。

うつしうゑば秋なき時や咲かざらん
花こそちらめ根さへかれめや　　業平

ぬれてほす山路のきくの露のまに
いつか千年を我はへにけん　　素性

心あてに折らばや折らん初霜の
おきまどはせる白菊の花　　躬恒

限なき齢のみかは見るからに
こゝろものぶるちらぎくの花　　清輔

今よりはまた咲く花もなきものを
いたくなおきそ菊の上の露　　定頼

ませなくば何をしるしに思はまし
月もまがよふ白菊の花　　西行

ぬれて折る袖の月影ふけにけり
まがきの菊の花のうへの露　　實朝

また俳諧には

しら菊の目に立てゝ見る塵もなし　　ばせを
起あがる菊ほのかなり水のあと　　同
菊畑おくある霧のくもりかな　　杉風

袖の色や起あがりたる菊の露　　其角

白菊や紅さいた手のおそろしき　　千代

蕉門嵐雪の菊花九首の吟は、高青邱の梅花九首に比して、賞讃せられ、其中なる

　黄菊白菊其外の名はなくもがな

といへるは、最もよく人口に膾炙す。また有名なる許六の百花の譜には、

菊の隱逸なるは和漢共に名にたちたる花なれば、あらためていひがたし。風流物好、目だゝたる事を嫌へば、よき女のなつきなどに後れて、閑なる片はづれに立ゐのび、齡も未だ三十路に、なるやならずの盛なれば、さすがに髮などおろすべくもあらず、たゞ一人あるをさなきものに引かれて、心ならず世の中に、住佗びたるを、はづかしきおもへる人には似たり。

と讒言一番せり。

菊合の事、王朝以後は、世態の變亂と共に、衰へたりしやうなるが、近く德川時代に至り、享保年間（百八十餘年以前）以後に、民間好事の徒、盛に菊合を行ひて、競ふて珍種を出したるとありといふ。而して

◎菊のきせ綿

とて、菊花の上に、綿を着すると、俗には露霜の害を拒ぐが爲なりと心得たるが、この事は伊勢の歌集、壬生忠見等の歌集などに見えはじめて、菊の露を綿に受けて、延年の功德を喜び、厄を拂ふとに用ゐたり。綿はたゞに白のみならず、赤黃なども用ゐて、一ッには飾ともなれるなり。また綿うつしの菊の香を、持てはやす爲めともいふ。枕草紙にも之が證とすべき詞あれども、こは厄拂の瑞祥の爲めにせしが本義なり。

◎菊人形の由來

今年もまた團子坂に菊人形を見るべき時節となれるが、抑もこの菊人形といふもの、江戶巢鴨の植木屋が造り初めたるが元祖にて、そは文化（九十餘年前）年間の事にして、菊花壇の盛飾に飽き足らぬ好奇心が、この花を以て鳥獸人間等樣々の形を造りしものなり。されど此頃は必ずや簡單粗末のものなりけらし。その後やうやく衰へしが、弘化年間（五十年以前）に及んで、巢鴨靈感院の會式の飾物に、菊を以て、日蓮遭難、蒙古征伐などの形を造りて、菊人形は再興し、其後たゞに巢鴨のみならず、染井、白山、駒込、根津、目黑など、植木屋の多き界隈に、菊人形を造りて、群集の足を引きしが後また衰へ、嘉永、文久年間に再興せしも、其後世の中騷敷なりてまた廢れたるが、明治十年に及んで、團子坂附近に、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

また〳〵始まりて、それより今日に至るまで、毎年同地の花戸、新奇を競ひ、其年の當り芝居の狂言を取組んで、俳優の似顔などを巧みに寫して、大仕掛にて、見物を招き寄せ、晩秋江都の一景とはなれり。菊人形、由來俗中の俗、雅客の之を賤しむと、古も亦今の如かりしとぞ。淵明等をして、之を見せしめなば、之を嘆ずると那許なるべき。

◎菊の種類、菊の異名

禮記の月令には、菊は黄を以て正色となすと記せり。黄か白かの單色なりしものまたはじめは小輪なりしものに、人爲淘汰を施こして、今日の如くに、百色百態而も盃大のものあるに至れり。されど菊の中にも優れて、まことに隱逸の姿なりとも思ぼゆるは、それ黄菊白菊の二か。嵐雪のこの二つの外の名をいとひたる、加賀の千代が、白菊に紅さした手を恐るゝなど、實に理ぞかし。其種類の數、宋の劉蒙が菊譜には、三十五、同國范石湖の菊譜には七十一、王路の花史左編には、百六十七を擧げたり。貝原益軒は當今二百餘種といひ庶物類纂は秋菊二百八十五、春菊十一を記せり。今に及んでは、中々に其數増して、たゞに二三百種にも止まらざるべし。菊は秋季に咲くを以て正しとなす。春菊、夏菊のあるは其初人工を以て季を違へて、異時の觀となせしもの、寒菊は、秋菊の晩るゝもの、即ち殘菊にて霜に傲り、雪にまがふとなど、此花晩節に香るとして稱美すると古來然り。

菊の異名たる我邦にては、まさり草、おきな草などいふもあれども、依然キクの音は白菊、黄菊、八重菊などゝよく諧調に叶へば、字音のまゝに用ふ。支那にては、いろ〳〵の異名あり、治蘠、節花、傅公、延年、白花、日精、更生、陰威、朱贏、女花、似故人、比君子、仙家子、瘦疾、輕身、裁雪拆金、香晩節、霜傑、制頽齡、和霜伴月、麗草、耀金華、儀鳳集鵷、星羅雲布、白華黄蘂、青柯紫莖、糅玉英、盈把、女節、女莖、周盈、傅延年、陰成、茶苦蒿、羊觀草、地薇蒿、金蘂、帝女花、壽客、冷香、佳友、賜鐘繇など、詞客が勝手の名を附したるもの多し。これ等は一般の菊を稱するなれども、種類の分稱に至りては、また思ひ〳〵の文字を弄せり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

今昔夜話

山下石翁

◎深草の元政は彦根の井伊公の近習なり。美男にして聰明睿智なりければ、公深く鍾愛せらる。元政、ふと或る女になれそめけるが、其女終生を托して堅固の操あり。勤めの身の止みがたなく、外の男子ありて、之を身受けせんとする由の聞えければ、元政大いに憂ひ、鬱々として物思ひに沈む。公之を見て一日慰さめて曰はく、汝病める如し心地如何んと。元政他なきことを告ぐれども、公聞き玉はず、汝速かに療養せざれば、遂に治しがたきに至らん、當分の暇を遣はせば、心置なく養生せよ、扨て養生とて外の事にはあらじ、よく／＼眠ることにあるべけれとて、枕一つを賜はる。錦に包みて結構の品なりしが、割合ひに最と重ければ、奇しみて開き見しに、中に黄金三百兩入れられけり。愕然として感泣し、急ぎ其の金携へて身受にとて奔りゆけば、悲しむべし、彼女は事の逃れがたきに思ひ切まりて昨日自害しけるとなん。通俗、此の事を仕くみて石井常右衞門の演劇あるは、元政の逸事を種とせしなりけり。元政の發心は此故にのみあらず。彼は其後依然、井伊公に忠勤して奉公怠たりなかりしが、久しからずして公亦た忽然として薨去ありしかば、元政遂に無常を觀じ、身を棄てゝ深草に隱れけり。歌に曰く

すまでやはかすみもきりもをり／＼の
　あはれこめたる深草の里

元政の歌を見るに、西行上人のに倣ひて別に格調あり。風韻超凡、人品の優雅自から顯はる。彼は其の大才を用ゐずして死せしかば、世の人徒らの隱逸と思へど、幸ひにして之を招きて其天稟を開霽せしむるの機會あらしめば、彼は優に日本歷史中第一流の人の班に入るべかりしならん。

◎西行上人も亦た豪のもの哉。勤王の精神烈火の如けれど賴朝の地盤既に固結して亦た施すべき地なく、則ち飜然として風流に托し、吟詠を事として忘れたるが如く、毫末も怨思を出さず。而も、到る處風俗人情を視察して、別に慰さむる所、敎ふる所あり、彼が足跡は福音の足跡なりけん、

後世景慕して止まざる也。而して、此の上人の言行を學びて能く其の神韻を嗣ぎたるを芭蕉翁とす。其の人品の發現は區區たる詠草に結べる露の珠に過ぎねど、之を透して其の非凡なる風采を想見すること難きにあらず。

◎家康と秀吉との間柄は、單に權謀一式の如くに言ひ做す人の多きこそ情けなけれ。同もに蒼生の救濟をもて任ず、苟くも彼等ほどの俊豪として、相見ること然かく淺劣ならんや。彼等は、既に相見ること炬の如し、安くんぞ亦相欺かん。既に相欺かず、安くんぞ相疑はんや。秀吉の死の床には區々たる家を念ふの私しはなかりし也。家康の經綸にも、大阪城を必滅せんとの工夫はなかりし也。大人の計畫する所は左程に性急に左程に淺薄なるものにあらず。

◎家康は正直一邊の人をのみ使用したり。所云る律義正直の四字は、彼が任用する家來の第一の資格なりき。彼自身超脫せる智慮あり、非凡の經綸あり、亦何人より策を聞くべきの必要もなかりき。彼は只だ其の立案せし所を授けて誠實に實行せしめ、之を先規先例として正直に保守すべき類の家來を要せし迄なり。信長が才子を愛して遂に光秀に殺されしは自業自得なり、秀吉が信長を撰みて之によりて立身せんとせしは、よく人を見し也。家康の万事の切り盛りは、急がず、怠らず、驕らず、誇らざるにあり。彼の經綸は少くとも百年以上の目途を立てらる、亦何んぞ功を急ぐの必要あらんや。

◎石田三成も忠臣たることを失はざれど、其忠義が餘りて反つて主家の亡ぶること速やかなり。片桐且元の如きは、智者にして且つ達人なる哉。太閤の彼を撰びて傅となせしは故ありと云ふべし、左れど、彼が如き達人は常に當世に於て、軟骨漢とせらるゝもの也。慷慨激烈にして硬骨などの名を博するは至つて容易なるものなれども、其の實功は數年ならずして消失して何の面白味もなかりしと明白となるべし。忡々たる苦心多くは腰拔け者となる達人の血涙中に存す。

◎西郷先生が當時にありて奸物とせられしは、今の人の殆んど忘るゝ所なり。慶喜が大阪より入京せんとする時、所云る君側の奸を拂ふと言ひし所の大奸物は即ち西郷先生にあらずや。慶應三年十二月九日、宮中に大議論あり。容堂、春嶽、象二郎等尙ほ一種の公武合躰說の如きものを唱へたり。此時に當りて斷然として拒斥し、匕首を懷にして、一擧の決定

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を覺悟せしは、他の大奸の名を得たる岩倉公なり。夫れかつて一と度び尤も信切に公武合躰に盡力せし岩倉と西鄕とは、他日尤も急激なる討幕論者なり。人間もと斷を要す。初め尤も厚く手を盡したるものは、又手を引くとの尤も快急なるもの也。大事に臨みて優柔不斷なるは、遂に何等の功をも奏すると能はず。

文藝

女子武道の極意

松本愛子氏談話

松本愛子氏は巾幗女子の身を以て、將軍家光の指南、柳生重兵衞が劍法の正統を九代の後に繼ぎ、且つ近頃世上に聞えたる、婦人義勇會の首唱者なり。記者就いて女史に正すに、婦人武道の要を以てす。女史は多年、これに關して考ふる處ありて、所謂其極致を談ず。其談話の概畧に曰く、

女子が武道の心掛の極意を發く處は、其産蓐にあり。神功皇后、應神帝を身籠ましましながら、親ら王師を率ゐて、三韓を征し玉ひしと、もし武道の心掛ある女子ならんには、强ち出來がたき事に非ず。されど女子劍を學ぶ軍旗戰闘の爲めにするに非ず、女子には其の分あり、家内に安居して、靜に一家の内政を齊理すべきものなり。而して此時に當りて、武道の心掛ありて、心膽の据りたらんものは、よく難局に當りて動せざるべし。而も女子の大難大厄は、其産蓐に在り、一たびあやまてば、母子共に危く、此時は生死を別つの機なり。然るをその夫にも見せずして、この大難を首尾よく通過して、見事の手柄を奏すべき場合に、尋常の婦人は、まづ大難といふに、氣後れ心ひるみ、かつ家内のものも傍に在りて、共に配慮一方ならぬより、産婦の弱り方一通りならず、爲めにあられもなき醜體をなすものも間々あるとなれども、こゝに武道の心掛あらんには、妊娠十ヶ月の間、一期一期に心膽を落ち付け、いざ出産といふに、更に心を安んじて、一擧にて敵を碎破するの覺悟をなさば、安々と分娩を成就して、また産後にも心の落付き確かなれば、出産の大事も事の外安樂にして、成就後の愉快一方ならず。怯者は未だ敵を見ずし

て、既に死す、剛者は然らず、大敵に臨んで、なほ無人の地を行くが如くす。武道の鍛練ある女子の産蓐に臨むや、彼剛者の如く、之れなきものゝ之に臨むや彼怯者の如く然り。自ら嘗て、長子を設けしや、七ケ月まで、弟子の稽古をなして、或時爲めに横腹を蹴上げられしとありしかが、一旦は大事をなしたりと思ひしも、よく〳〵心を落付けて、産蓐期に至りては自ら人をさけて、首尾よく安産をすましたるに、後産二日の後までも下らず、傍人は甚だ氣を揉みたれども少しも動ぜず、成るを待ちしに、これも無難に濟みて、肥立も速かなりき、人は、乞食の産などゝ笑ひし計なりき。去かれども、無難にして此大事を成就するは、女子に最も必要とする處にして、また最も女子の心掛くべき處なり。今の醫術嚴密に産婦養生の法をいふが爲めに、却つて本人はじめ、傍人をも怯臆せしむるの僻あるはよろしからず。

くれにけり秋の日かげもあらし山
もみぢをわけし入相のかね　　後鳥羽院

戯曲評釋 葛の葉子別れ

かも子

支那人古來往々、非情化人の怪説あり。謠曲なる高砂、遊行柳、杜若、芭蕉、胡蝶、西行櫻其他の如き、また淨瑠璃なる「三十三間堂」柳のお柳及び、今爰に評釋を試みんとする「大内鑑」の葛の葉の如き、いづれも、其趣構を、彼怪説に假り來りて、詩人作者其妙手腕を以て絶好の文字となせるものなり。

扨て「蘆屋道滿大内鑑」は竹田出雲名作中の一なり。其中にも、野狐化して女となりし葛の葉が子別れの段は悲慘を極めて、文致の妙また之に叶ふ。凡そ人情別離より悲しきはなし。然るに、非情の野干、一度び奇縁の結ぼるゝ處によりて、交りを人間に結び、中に可愛の子さへなして、よしや其通力を失ふとも、永く人間の身となりて、百年の語らひを冀ひしものゝ、俄然其樂しみは破られ、義理切迫して、直ちに人界を去らずんばあらず、而も其戀慕する夫と、最愛の兒とを棄てずんばあらず、素より死別に非ず、されど生きて別るゝも、再び此身を現じて彼等と會すべきに非ず、其懇痛素より死別に優る。縱假令ひ九廻すと雖も、此情と、その本身とは、耻かしや之を夫にさへも示すべきに非ず、語るべきに非ず。この哀別離苦の境界、何等の慘事ぞや。如斯きは怪々の談、素より實あるべきに非ずと雖も、假に之が實在を想像する時、それ果して如何の情ぞ。詩人爰に見るあり、往々にして非情の情を以て、有情の情を動かすこれ其猾手段歟。

＊　＊　＊　＊　＊

我は誠は人間ならず、六年以前信太にて、悪右衛門に狩り出だされ、死ぬる命を保名殿にたすけられ、再び花咲く亂菊の千年近き狐ぞや。

起手其素性と履歴とを語りて、其情緣のゆかりを說く。突如して我は誠は人間ならずといふもの、以下の波瀾を提起するの風雲。

剰へ、我故に數ヶ所の疵を受給ひ、生害せんとし給ひし命の恩を報ぜんと、葛の葉姫の姿と變じ、疵を介抱、自害を止め、いたはり付添ふ其内に、結ぶ妹脊の愛着心、夫婦のかたちひなせしより、夫の大事さ、大切さ、愚痴なる畜生三界は、人間よりは百倍ぞや。

野狐なほ情あり、生命の恩を報ぜんとする一片の眞心によりて、恩人の許嫁の形影に化したると、偶然にして遂には偶然ならず。愛着の心、不圖も萠して人間の交をなし、夫婦の語らひ、膠漆の如し。身は元と野狐なり、耻づるの念ありて、而も戀は切に夫れぞとも知らぬ夫にかしづくの志、此に於てか深し。夫の大事さ、大切さ、愚痴なる畜生三界は、人間よりは百倍ぞやとは、何等の奇語ぞ。而もこれ奇にして奇ならず、非情の情を以て有情の情を動すの手段。

殊にわ子を設けしより、右と左に夫と子と、抱て寐る夜の睦言も、夕べの床を限りぞと知らず。野干の通力も、最愛し可愛に失せけるが、今別るゝまで、父御前の業でもなく、元より名をかり、姿を假りし葛の葉殿、恩は有れ共怨みはなし。

既に夫あり、また子を得たり、愛着のほだし、百重に千重にからみつきて絕ち難く、爲めに野干の通力さても失はれざるを得んや。否な其通力を失つて、この愛着を喜びしも、何たる事ぞ、今一朝にして其快夢破れ去らんとは。されど誰をか怨まん、眞の葛の葉顯はれ來りたりとて、その名を假り、其姿を寫して野干の身にありながら、今日までも人間最上の樂を受け得たる恩あり、何をか怨みん、去ながら愛着の斷ち難きは、誰しも同じきに、まして愚痴なる畜生三界の野干、いざといひて何と諦めのつけられやうぞ。

庄司殿御夫婦を誠の祖父樣、祖母樣、葛の葉殿を眞實の母と思ふて親しまば、さのみ憎うもおぼすまじ。悪あがきを、ふッつと止め、手習學文精出して、流石は父の子ほどあり、器用者と譽められよ。何をさせても埒あかぬ、道理よ狐の子ぢやものと、人に笑はれ誹られて、母が名迄も呼出すな、常々父御前の虫螻蛄の命を取り、碌な者に成るまい、と只假初のお呵りも、母が狐の本性を受繼ぎたるか、淺ましやと、胸に釘針刺す如く、何ぼう悲しかりつるに、成人の後までも、小鳥一つ、虫一つ、無益の殺生はしすなよ。必ず〱別るゝ共、母は和郎の影身に添ひ、行末長く守るべし。

されど遂に留るべきに非らず。將に去らんとして、最も心のひかゝるは、現在野干の血を分けし、我子の上なり。並々の人間でさへも、我子に別るゝとあらば、其子の行末よかれかし、跡の人達に可愛がられよと思ふ心の切なるに、これはまして人ならぬ野狐の血を分けしとて、人に笑はれ誹られな、自ら常に其身を耻ずつれば、更に我子の上の心元なさ、かゝる譯ある子を殘す、母の心や如何ならん。

文茲に至りて忽ち筆を轉じ來る妙。

とはいふものゝ、振り捨てゝ、是が何と歸られう、名殘をしや、いとをしや、放れがたなや、此方寄れ、と抱付け、抱〆めて、思はずわつと泣く聲に、保名一間を走り出で、仔細は

聞たり、何故に童子を捨てゝやらるべき、と呼はる聲に、庄司夫婦、葛の葉も轉ひ出で、放ちは遣らじと取付けば、抱きし童子を、はたと捨てゝ、形は消えて失せにけり。

遺誡しかく殊勝氣にいひはいひしものゝ、さりとても／＼、離れ難きは親子の情、去るべくして去る能はず、膓を千々に絞りつゝ、愛着の切なさに、思はず叫びし泣聲は、思ひきや、忽ち消えて失すべき機會とならんとは。光景爰に一變、先づ戀慕の夫の現出するあれど、別離の情逃ぶるに隙なくして、餘人また來り、母や我に去らずんばあらず。人の敢て止むるは、いよ／＼速に去るべきとを促すが如く遂に去る、止まるもの恨思綿々。

庄司目をしばたゝき、エヽ扨て夢ばかり、斯と知りたらば、うか／＼尋ね來ずとも、仕樣も有るべきに、無慘の次第を見る事や、と夫婦が悔めば、

止まる者の中、最も別離の悲を知るものは、保名なり、されど先づ其悲慟を點出するとなくして、哀情最も輕き庄司夫婦をして、其情を語らしむ。庄司一人をして其情を語らしめて、夫婦が悔と結べるは、これ省筆の法。

葛の葉も、手持無沙汰に見えけるが、アヽさうぢや、何は兎もあれ斯もあれ、自が姿と成り、自らが名をなのり、産で貰ひし此坊は、取も直さぬ我子なり、父樣、お母樣、お前方の爲めにも、眞實の孫ぢやと思ふて下さんせ。コレ坊稚、今から此母が身にかへて最愛がる、今迄の母樣の樣に、母樣／＼と、ゑなつこしう賴むぞや。オヽ好い子やと抱き給へば、

眞の葛の葉も亦、假の葛の葉が、忽然として去るに當りて人と情を異にする處なくんばあらず。ゆくりなくも善後策を案出して、孤兒の愛を買はんとす。此時保名の情いよ／＼逼まり來らずんばあらず。

乳を探して、いや／＼／＼、此母樣は、そでない、と膝を這ひ下り見廻して、母樣／＼、と呼び叫べば、

遺子、頑是なし、保名更に胸せまり、張り裂くばかり、さては遂に破れぬ。

保名堪へ兼ね、大聲上げ假令野干の身なり共、物の哀れを知ればこそ、五年、六年付纏ひ、命の恩を報ぜずや、況や子迄まうけし中、狐を妻に持ちたりと、笑ふ人はわらひもせよ、我はちつとも恥づかしからず。別る共相對にて、互に合點の其上は、失せもせよ、消えもせよ、此儘にては何時までも、放ちはやらじ、ヤア葛の葉、童子が母よ、女房よと間の襖を引きあくれば、向ふの障子に一首の歌、

戀しくば尋れ來て見よいづみなる信太の森のうらみ葛の葉

ハテ扨は一首の紀念を殘し、難面うも歸りしよな。我に名殘は殘らず共、童子は不便に思はずか。

保名遂に堪へ兼れて、其恨みと悲みとを述ぶ。理を說き、情を語り、切に止めんとすれども、今やなし。互に合點の上にてと望むも、豈に其時あらんや。案より別離欲する所に非ざれども、身を恥ぢて、斷ち難きを斷ちて、情盡きざるに去れり。去るものゝ悲痛、留まるものよりも甚しきあり。

保名、去る者の最も離れ難くする童子の名を稱して、我愛する者を留めんとす。されど影既に無し。

一首の歌、歌としては見るの價値なし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と奥にかけ入り表に出で、狂氣の如くかけめぐれば、童子も父の跡に付き、母樣何處へいかしやつた、母樣なう、とカッぱと伏し、聲をばかりに足ずりし、身をもだえ歎くにぞ、庄司夫婦、葛の葉も、共に哀れに取亂し、前後不覺に歎かるゝ。庄司歎をとゞめんと思ひ、ヤア保名、不覺なり、狐ばかり葛の葉で、我娘は葛の葉ならずや、殊に殘せし一首の歌、戀しくば、尋ね來て見よと讀んだれば、いつでも信太へさへ行けば、出合ふに疑ひなし、エ、未練散々、卑怯至極。

爰に於て乎、狂せざるを得ず。童子の悲歎、更に其亂心を增さしむるのみ。愁歎の涙、一坐を濕す。

人の情は盡きずと雖も、文に於ては愁歎やゝ盡きたり、悲哀の場永きに過ぎたれば讀者をして飽かしむ。故に光景當に一變すべし。よりて忽ち第一に歎きを遁べたる庄司をして、爰に亦た先づ歎きより立たしめて、苦言義理を語らしめ、且つ以て後段の伏線をなし、また光景轉變の花道を造る。以下果して一波瀾を點出し來りて、この哀れッぽき、しんみりさせるに對するに、壯快極まれるものを以てして、戲中人物の悲歎を奪ふが如くにして、又觀客をして、快く其涙を拭はしむ妙筆といふべし。其餘今之を畧す。

子別れの後段に、葛の葉古巢へ立ち歸へるの場あり、その道行の文字、また頗る妙、左に之を拔出す。

爰に哀れをとゞめしは、安倍の童子が身の上なり。元より其身は畜生の、苦しみ深き身の上を、語り明かして、夫にさへ、添ふに添はれず、住み馴れし、我が故里へ歸ろやれ。我住みすてし一村の。假の宿りは朝霧に、立ち紛れたるいろ〳〵菊も、此身しるかと恥かしく、足爪立てゝ、ちよこ〳〵〳〵、ちよこ〳〵〳〵と爪立てゝ、所體は亂るゝ萩瀨、はつと思ひてさりなを、作り綿ふ笠の内、傾く日影まばゆくて、忍ぶ身の、さはりは此處の人里、彼處の往來、それに嫌なは犬の聲、悚とした、憟さそげたつ露時雨、降りみ降らずみ照降りに、我は古巢へ歸る身を、嫁入〳〵と里の子の、あの愛氣な見るにつけ、跡にまします父母に、預け置いたる稚子の、乳房尋ねて、さこそ歎かん不便やと、涙に道も見えわかず、こゝは何處と白露の、千草に喞く虫の聲、猶悲しみや十寸鏡、水に映して我姿、かいしよ有氣に行く野路を、そよ〳〵戰ぐ野分につれて、あはや、おほてに、から〳〵からり、鬼かぬ鳴子の音すれば、もし狩人有やらんと、周章驚き振り返る。小鳥追ふ家は戶鎖して、夫とさがむる人だにも、泣いて身をもや悔むらん。今は悔ゆまじ歎かじと、いへど亂るゝ蘭菊を、分けつゝ行けば、程もなく、我住む森の下蔭に、立休らふと見えけるが、草がくれして。

始終、狐にして人情を有せるものゝ態度を失ふをなく、また其悲哀を盡くす、老筆といふべし。

兒　籃

紅葉のにしき

よし子

今日はお天氣もよし、温たかくもあり、瀧の川の紅葉を見に行きませうッて、お孃さんが二人、美くしい着物を着て、赤い鹿の子をかけて、お辨當もつて、連れ立つて行きました。スルト、まだ外に人は來て居ませんでしたから、二人で面白く

遊んで、手を引合つて、橋の上に立て、紅葉を見て居ました。其方の葉一枚オイデ、此方の葉一枚オイデ、早く飛んで下りてお出でと、手を拍いて呼つて居ました。

スルト、紅葉が樹の上の方で言ひますには、モシ〳〵、お向ふの紅葉さんに、お隣の楓サンに、うしろの方の木の葉サンエ、ちよいと、下を御覧なさい、あの橋ン上に立てるお嬢さんを御覧なさいよ、何てふ美くしいお嬢さんでせう、着物の美くしいとネ、鹿の子の赤いと！、アレ御覧よと言ひますから、楓さんや紅葉サンがずつと下を見ますと成程美くしい、眞とに浦山しい、どうか、己等もアンナに立派になりたいとツて、しきりに話して居ました。

後の方の木の葉サンには、少し見えません。モシ〳〵紅葉さん、どちらですエと言ひますから、ソラ、こちらですよ、此處から顔を出して御覧なさいよと言ひますから、ズツト枝を伸して、紅葉の中から青い顔をヌツト出して見て居ます。下ではお嬢さんたちが之を見て、チヤ〳〵まだあんな青い葉があるよ、あれは紅葉でないか知ら、「紅葉でなきや、紅葉におなり、早アく紅葉になつて一枚飛んでお出！」と又々手を拍いて言ひますから、木の葉は殘念でたまりません。ピンと枝をはねかへして、腹を立つて居ました。

紅葉や、楓は、相談しました。ナント皆さん、お互ひにコンナ高い處計りに居ても、ちつとも面白くないヂヤアありませんか。お辨當もありやしないしサ。毎日〳〵人の御馳走を食べてる所ばかり見て居るのもつまりません。どうです、コ、デ皆ンな相談して、お互ひの美くしい葉が寄り合つたら、お嬢さんの下着位な美くしい反物にはなれさうなものだから、夫が出來たら、皆ンナがかはり〳〵に着て人に見せてやりませう。夫が宜しからう、夫がよからうと言つて早速話がきまりましたから、紅葉や、楓が、一枚づゝ、ポロリ〳〵と枝から落ちますと、皆ンナ川の中へ落て仕舞つて、サツサと流れて仕舞から、ガツ〳〵と泣きましても、仕方がありません、とう〳〵流されて仕舞ひました。

スルト木の葉もくやしがつて、其のまねを仕度と思つたが、霜にあたらないと紅葉のやうに赤くなれないと聞いて居たから、南無、大慈大悲の天道さま、どうか霜を降らせて私の躰を紅葉のやうに眞赤にして下さいませと祈つたら、霜が眞白

になるまで降ました。スルト木の葉はたまりません、ビッショリにぬれて、みンな皺くちやに枯れて、黄ろになつて死んで落ちて仕舞ひました。

隨感

學を誤まり易きの歎

隣りの暮し向は一々明らかに知る由なけれど、吾家の事を推して考ふれは大抵は知らるるなり。人の心は推察しにくきものなれども、吾心に當はめて思ふときは、其の情合ひを覺るとを得べし。明日の事は、今日の事より推し及ぼし、來年の事は、今年の事より推し及ぼし、今年今日の樣子をもつて去年去々年より百千年の昔しの事までを推及するときは、掛け離れたるとも目前の事のように感ぜらるゝものなり。諺ざに、吾身をつめつて人の痛さを知り、今日の事より明日の事を知れと言ふは、此處の心得方を敎へたるもの也。然るに、學問と云ふもの、大抵は、本を讀み、古人の説を聞き、外國や古への經驗を學ぶとより手を着くるの習ひなれば、入口自づから疎遠にして、まはり道より迂回するの心地あり、何となく吾心身直接の關係より離れたる事のように覺ゆるは免かれがたきとなり。夫れ故、學者が日々苦心勉强する所は、余處外の事にて、今日我が家、我が一身の上に直ちに行ふべき手近の事は自づから遠々しくなるのみか、後には、此の遠々しくなるが高尚氣に見へて、己れも人も之を學者風と言ひ做し、學者は迂遠なるものゆゑ、あまり世事人情に巧者ならぬが見所なりと言ふものすらあり。

此の弊を歎息して實地實際の修行を第一とし、本は必らず讀まずともよし、昔しの事は必らず知るを要せず、先づもつて一身を修め、一家を齊え、家業に精出し、人づき合ひを好くし、年貢を上納し、君帝に忠を盡すべし、これ人事至極の所にて即はち學問の本願なり。もし斯の如くだにあらば學びずとも吾は學びたりと言はん、學問の主意他あらんやと論ずるものあり。一應は聞こえたるとなれども、人の生涯が日雇かせぎに類するのみにて、能く働らき樂に生き人の害をせぬと

云ふ丈にては、如何にも面白からぬ事なり。天地の美妙は書にも書きがたく、筆にも記しがたし、たゞ人々が心に會得感歎して絶叫して愉快を悦こぶヿとなるが、此の美妙を味はふ丈けの目も開かで死して行く盲人を不愍ならずとする乎。人の心に靈妙不可思議の寳あり、釋尊は此を佛心と云ひ、基督は此を神性と言ふ、如何にも有がたく忝けなき寳物にして、人は生れ乍ら何人も所有してあり乍ら、之を開張して其の姿の一寸一分をも自から窺はず、只だ草木土灰と一樣の最後を遂げる犬死は、誰が考へても面白からぬ筈なり。今年より來年と過ぎゆきし吾が經歴を顧りみれば、失敗失望累々として恥かしき跡方のみを遺せど、一と度び氣を轉じて考ふれば、吾が才智の進歩も亦た非常のヿとなり。知らざりしヿを段々に知りて、吾が眼力のやうやく明るくなり、吾が世界の益々廣ろくなるヿを思へば、例へば、歩々新らしき芝居を觀つゞけにして、一足一足、幔幕の切り落さるゝが如し。成敗の外に吾が樂しみを求むれば、さて〳〵智慧の探究と云ふヿの面白きもの哉と覺らるゝならん。然るに、毫も此邊の進歩なく、年々に精神萎靡し、智力の弓次第にゆるみ、段々に氣の張りもぬけ、只だ、せち辛き經驗に苦情をこぼすのみにて、一向に智慧を研くと云ふ樂しみを知らぬ人物は情けなきヿならずや。左れば、只だ卑近の事に骨を折りて、世のすぎわひに巧者となるのみにては、人の一生は果敢なきもの也。

何卒、學問を空にせず、之を實際にすると同もに俗にせず、卑近の事にも當てはめるは肝要ながら、之に溺れて其の泥濘に游ぎ廻るを能事と心得ぬやうに致したきもの也。之は言ひ易くして行ひがたく、言ふものは多くして、行ふものは少なきヿにて、古來万國、同樣の歎きを繰り返すものゝみ也。其の歎きを聞き乍ら、吾も亦た同一の弊に陷いらんとするが、人の常態なれば、誰れも〳〵能く氣を着け、心に切に省りみて、所云ゆる學問の方針を誤まらぬやうに致したきもの也。此は、教師、學生、同一の戒しめたるヿ勿論也。

○實に無常なり

數日前、吾を訪づれて色々身の上の事を話されし方が忽然永眠して復た此世の人ならず、幽明、界を異にして言語を交えんようもなし、無常迅速の變化今更にて、生死流轉の世相色

を鮮やかにして示す。申す迄もなく、悲慘の世の樣哉。夫れ、薄き膜に一斗の血を盛り、日々の苦辛に刺をさゝる思ひす、いつ何ン時、破裂出血せざることを得んや。三寸の吹子、五尺の躰に氣息を送りて、風の膨張力にて全躰を推ひろぐ。顔に皺より、骨やうやく曲る、何の時か氣息の拔けざることを知らん。舟子、板一枚下を地獄とすれど、人生は元と地獄の中に呼吸し、僅かの張りをもつて生命を維持する也。累々たる死者の墓は吾ゆくてを示し、一家の佛壇終始嚴として末期を語れど、花はいつ迄も咲き、春は久しく老いざるものと思ふこそ、人の空頼めなれ。

愛らしき吾兒が無邪氣なる顔して最と快ちよく眠り居るを醒さんは忍びず、折々笑つて何事やらん語るは夢中の戯むれなるめれど、夢なりとて其の樂しみを破るに忍びず。夫れ滔々たる世人多くは睡り、而も迷夢さめざる中に喜戯遊樂す、たとひ夢なりとも一々驚ろかすに堪へんや。然りと雖ども、毒蛇、其の睡眠中に近づかば、ゆすぶり起すとも戒しめずんばあらじ。夢におそはれて泣き叫ぶを聞けば、其儘には放任しがたし。生死の眞相を明らかにして、迷悟の機を説かんは、もと是れ慈悲心に出づ可し。

思ひめぐらせば、吾が前世は憂鬱厭世の奴隷なりけり。一と度び死と云ふことを感じそめてより、晝も暗く、人にも會ひたからず、花下に泣面して落葩をかこつのみなりしが、何事のおはしけん、一と度び聖化を崇むりてより、心少こしく落付き、吾が本躰の置場定まり、小膽居ずまひをたゞし、變化無常の外に一ヶの妙境あることを發見したりける。たとひ之より後ち疾病あり絶息あり又所云ゆる死てふものゝ來らんとも、吾の吾たる本我は長久に死すまじとは悟られたり。顧りみれば、薄信倘ほ取るに足らずと雖ども、薄信の故に亦た信ずる所あり。天上天下、豈に吾につらからんや。只管らに感謝して吾が生命をたのしむ。

○月夜の感謝

村外に月を觀る、白雲漠々、月光其間に澄む。一面の郊野、羅をもつて掩はれたらんが如く、淡墨の樹木三々五々として其間だに彩どる。寂たり、幽たり、ひとり美妙をたのしむ。嗚呼、皇天此の風雅を示す何等の恩惠ぞ。

雜録

海舟翁近咏

小車のやぶれしあとのわだちとも、
　知らでやあはれめぐる小車。
枯尾花榮花の夢をまねきけり。
一世の夢をさますや散る　みぢ。
　人の世にかまはず咲けよ菊の花。
　秋の蝶三十年の歸り花。
時めきし跡やよもぎふ枯尾花。
さか道やさつさと下る散るもみぢ。
　高どのや元のあるじの夢のあと。
　にはとりをわしのはごくむ寒さ哉。
蕃閥のゆくへをかたる霜夜かな。
ひざだいて富貴をかたる小春かな。
　夜のあられ榮花の夢を破りけり。

くりのいが内より虫のいでにけり。

太田道灌

かくぞとは君にしらせん道もがな、
　いや榮えゆく千代田寶田。

貧民窟

澤あんを三つにわくるしぐれ哉。
落栗やきふとゝ孫のかて二日。
　たうなすに一日は餓をいやしけり。
　村しぐれみつぎふみこむどろぬかり。
新米や玉をかしぐの思ひあり。

陸奥だより

美よしの女

陸奥の名所としいへば、松島の勝景、末の松山、野田のたま川、宮城野の萩、など〻誰も〳〵指を屈めり。されど彼の能因法師が、「夕されば汐風こして陸奥の野田の玉川千鳥鳴なり」と詠じたる玉川も、今は水かれて千鳥のかげもなく、かた

みの松に僅におもかげを止むるのみ、又西行法師の「宮城野の露も色ある古枝草ことしの秋も花はさきけり」と歌はれし宮城野の萩も、今はいづこゆきけんあとかたもなく、目にあまる宮城野の廣野は田畑とすがたをかへたり。さればこそ「みやぎ野の月はいづこと人とはゞ稲葉の末と我はこたへん」と吾も人も云ふなれ。かゝる筋はみやびの道に暗からぬ方々は皆能く知り給ふことなれば、皆省きていとも〳〵無風流の事の數々聞えあげんに、

○風俗　質素にして飾らず。併し食物は比較的に美味にして多量に用ふるやに思はる。仙臺の食ひ倒れとか土地の人自ら申すを見ても、其氣味あるを知らる。又女子の髪飾りの如きも衣服に準して質朴なり、路上にて珊瑚の根がけ櫛笄の見るべきものを飾り居る婦人を見かくるも、大低は其地の言語を用ひぬ所を見れば、かゝる人々は恐らく他縣人なるべし。中等以下の婦女が勞働く時には、モヂリと云ふ筒袖の長き半天を用ふ。地色は紺無地にして太地の木綿なり。又東京人が夏の始め或は終りに着る如き紺地の絞にて、筒袖の長襦袢を仕立て着ること大に流行す。下等社會の婦女は、老少の別なく、皆等しく之を用ひ、片つま或は全裳をはしよりて之を出し、他人に逢ふもおろすとなく、朝起くるより夜に至るも改めず、他縣人の目にはいと異様に思はる。婦女の頭髪は中等以下櫛卷多く丸髷島田に結ひたる人は目に立つ程なり。櫛卷に次ぎて多きはいてふがへしなり。髪飾は紙或は貝製の玉を用ひ絹布をかけるもの至て少し。髪飾を總てかゝせと云ふ。花かむざしの如きは大低東京より廻りしものにして、其價は東京にて買ひ求むるより五割も高し。されど他のものに比すれば需用多きとか聞けり。

食物は衣服に比すれば各地ともにおごれるが如し。中に就きて仙臺の如きは流石東北第一の都會なれば、諸味備れるが如し。されど我等東京者の口には更に適せず。彼の有名なる仙臺味噌も、東京にて味噌汁の料とせしときは、いと美味なりしが、本家本元の仙臺にて仙臺風に鹽梅せし味噌汁は、しほからく思ひ出しても湯茶のほしき心地するなり。殊に仙臺にては煮物に醤油を用ひずして、味噌を遣ふこと多し。カボチヤの味噌煮、大根の味噌煮、芋の子汁の如き東京に於ては餘り見ざる所にして、當地の人の好む所なり。又味噌汁を朝夕

二度の膳につくるが如きもめづらしき心地す。總て地方の料理はしほからきものなるが、東北地方は殊に然り。彼の妙齢の少女が似つかはしからぬ鹽から聲ふり立てゝ語るも、或は之れが爲めにやなぞと口さがなき京童子は云ふめり。

家屋は人口に比して土地廣きが爲に、平屋多く外見莊麗ならず。殊に出火稀なる土地のことゝて、すゝけて黒く、清潔ならず。寒國人の僻にや掃除を怠り、棚或は天井の隅々には煤ちりごみいやがうへにも積み重り、涼風室内に入れば時ならぬ白雪を下すこと少なからず、潔癖ある東京者の特に恐るゝ所なり。間どりは毎戸一樣にして、申し合せたるが如し。古き家造りに據りて建てたる所は通氣よろしからず。冬時寒さ凌ぎの用意にや、大抵北を塞ぎ南東を開きたる建て方多し。市内大通りの外は茅葺屋根なり。又鹽竈街道、松島の邊より北岩手に至る山家には、穴居の遺跡少なからず。松島、瑞嚴寺の岩屋、御島（一名雄島）の洞穴の如き皆人々の能く知り給ふ所なり。

○○言語　音聲鼻にかゝりて聞き苦しく、從て聞き慣れぬ耳には聞きとり難し。今方言の一例として仙臺市内にて行はる中等以下の婦女の言語二三を擧げんに、

チラ、ヤンダー、（私は厭で御座います）○チレ　クッカラ、（私が參りますから）○ミサイ（御覧なさい）○コイツ、クナイ、（これを頂戴な）○ガイ（いらつしやい）○ベコ、クアン、（牛肉は食べません）○ナンボシヤア（いくらいたしますか）○イガラ〳〵、（何宜しう御座います）○ヨカンベッチヤア、（よろしいではありませんか）等なり。其他シをス、ツとス、ヌとクなどの假名違ひいと多し。（つゞく）

入相の鐘ゑとき

鷗

本號の口繪に、入相の鐘と題して載せたるもの、原書は稱へてアベ、マリア（Ave Maria）といふ。アベ、マリアとは、舊教徒が聖母マリアを讃美する時の語にして、恰も佛教徒が、南無観世音菩薩などいふにも似たらんかし。

而して又アベ、マリアとは、從つて人民が、この尊き讃美の言葉を提唱する刻時をも意味するとゝなりて、殊に以太利

にては、日沒後半時間、及び未明に、會堂の鐘、なり響きて、家にあるも、野に在るも、皆一樣に、今ぞとて聖母を讃美するの聲を捧ぐる其頃の景をいひて、畫家、詩人等直に之にアベ、マリアの名をぞ下すめる。口繪に見えたるは、即ち其光景を描きたるものにして、時は、日、既に西山に沒して、晩靄空を籠め、鳥は塒にかへり、野に在る民は、皆將に鋤を肩にして、今一日の疲れをやすめんと急ぐ。

然る折柄に、水清らかに、風波を揚ぐるとなき、漫々たる湖水を隔てゝ、遙に聳つ、一宇の高塔よりして、時は其時なり、鏗々として、鐘聲、遠く響き來りつゝ、暮色の寂寞を破るあり。將に家路に急がんとする農夫の一家族、之を聞きて、卒然襟を正し、容を改めて、嚴肅に起立せるは、畏みて、アベ、マリアを繰返しつゝあるものならん。老父、老婆の如何に老實なるかは、其滿面にあらはれ、少女の我れ劣らじと謹めるも愛らしく、男兒の何の用捨もなく、犬と共に狂ひ戯るゝもまた無邪氣なり。

一面の畫圖、天地の靜謐なると、鐘聲の嚴肅なると、農夫等の敬虔なると、また其一家族の和樂の狀、いづれも皆美しく描き出されたるや、吾人をしてこの理想富贍なる畫景に向つて感慨轉た少からざらしむるものあり。

此原畫は獨國畫伯ラウプ氏の筆に成る

◎冬季の美味品

●魚類には

ひめち、さらぎす、さより、あまだひ、いさより、はも、うぐひ、白魚、鯉、鮒、ぶり、めなだ、まびまぐろ、わらさ、あんかう、はぜ、ほうぼう、たら、ひらまさ、めたひ、めしな鯛、えびす鯛、むつ、たけのこめばる、せみ、やがら、おこぜ、からすみ、まばえび、いせえび、烏賊、蛸。

●禽介類には

野鴨、牡蠣、たいらぎ、まどみ。

●野菜類には

にんじん、やつがしら、頭芋、柚、葱、ちよろぎ、せり、大根、梅田牛蒡、ひば、干大根、干蕪、澤庵大根、ながいも、からし、えのきたけ、蜜柑、金柑、もやし土筆、もやしうど、はうれん草、慈姑、なま海苔、なま椎茸、くろくわゐ、根芋、わらび、はな菜、めじそ、みやうがたけ。

○菊茶の法

料理菊の蕚を取りのけて、純良の鹽に漬け、よく封じおきて、二三週間のちにさり出し、茶碗に一輪または半輪をいれ、上より熱湯を注ぎて飲用すれば、一種の香氣ありて風味もよく、茶の代用さなる。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

甘藷料理　（三）

●（四十八）饅頭いも　藷精に麵粉交溲合せて、醴にて展し、濾しいもに砂糖入れたるを餡にして饅頭の通りに製し、焙爐にかけ、よく乾き上りたるを蒸すべし。
●（四十九）水引いも　生にて竪にへぎて、細く切り、中をくゝりて焙爐にかける。
●（五十）菜花（なたね）いも　燒いもを馬尾篩ごしにして、鬱金の粉少し入れ交合してまた濾し、浸しもの鉢の上へ、はら〳〵とふりて出す。
●（五十一）贋鷄卵樣（にぬきなり）いも　蒸芋を馬尾篩ごしにして鬱金の粉にて染め、鷄卵の黄子の大さにまろめ、藷の精を稀葛の如くに煮たきて藷の精を堅くこれたるものにて、上をまきて、蒸して小口切にすべし。
●（五十二）小倉野いも　燒いもを馬尾篩ごしにして大納言赤小豆を煮て入れ、石蜜（こほりおろし）末にて仕立る。中は藷精に石蜜末まぜ煮て製す。
●（五十三）蓮射込いも　蓮根長さ二寸ほどに切り、よく湯煮にし、蒸いもの馬尾篩を色付にして、穴の中へ入れ小口切にす。
●（五十四）いも餅　糯米を蒸してよく搗き、其中へ蒸いもの皮を去りたるものを搗き交ぜて、小さく取り、砂糖味噌油煠石蜜末撒などにするよろし。
●（五十五）鍋烙いも　生にて卸し、麵粉少し入溲れて赤小豆の餡をいれ、饅頭の如くに取り、蒸あげし米の粉をまぶし、烙目二ツ斜につける。
●（五十六）牛蒡射込いも　牛蒡三寸程に切り、ざつと湯煮でゝ、中の心を取り、稀醬油にて味をつけたるへ、蒸いもの馬尾篩を色付にしたるを牛蒡の中へ入れ、小口切にす。
●（五十七）氷柱（つらゝ）いも　生にて細くきり、葛粉にてまぶし、湯煮にし、調味は好み次第。
●（五十八）和布卷（めまき）いも　生にてよろしく切り、相良和布（さがらめ）にて卷き、酒と醬油等分にて煮るべし。和布を卷くとき、葛粉か麵粉かを和布につけて卷き、糸にてくゝりて煮る。
●（五十九）松露いも　生にて骰（さい）に切りて、ざつと湯煮にし、味噌漉に入れて振りまはし、角をとり、調味好みにまたがひ用ゐべし。煮すぎては碎けて惡し。
●（六十）しめじ芋　生にて卸し、蕈（しめじ）の笠の如く、遍目にとり、やき鍋に油を塗り、炭火にかけてやき目をつけたるへ、藷の精を細く展し、紙に包み蒸して、丸き棒にとりて切り、軸さしてつける。
●（六十一）紅蒲鉾いも　蒸いもを馬尾篩にし、紅を交ぜ合せ、板につけかため、其儘切りて用う。
●（六十二）おまん鮨いも　生にてへぎて、鹽少し入れ、ざつと湯煮にし、筥に竹の皮をしき、藷を一面に置き其上へ、飯を二分程置き、又いもをひつしりと並べ、竹皮をしく。如斯くすると五邊ばかりにして、蓋をなして、壓をかけ能程に切りてよし。加料は好次第。
●（六十三）蜜柑餅子いも　柚釜のごとく、蜜柑の實をとり、濾いも百目、粳米粉、砂糖各三十匁を溲合せ、蜜柑の中へ入れ、稀醬油にて煮、陰乾にして切りてつかふ。また丸箸五本にてはさみ、糸にくゝり、小口切にすれば、花形になる。
●（六十四）吉原いも　生にて丸剝か、または角切にして梅醋に浸け、よく〳〵赤みの付きたる時、梅醋つけの紫蘇にてまき、砂糖に漬めおき、小口切にして用う。
●（六十五）蕎麥切いも　生にて卸し、蕎麥の粉等分に交ぜ合せ、藷精を稀葛の如くに煮て冷し、これにて以上を涅れ合せて、そば切の如くに打ちて蒸し上げて、出し計葱白のざく〳〵、おろし大根、山葵等を加料にす。蕎麥の粉にかふるに饂飩粉を以てしたるを藷饂飩（いい）といふ。
●（六十六）いも素麵　藷精にて仕立る。葛素麵の仕方に同じ。
●（六十七）いもあへ　蒸いもにても燒藷にてもよろし、馬尾篩濾にして、精進もの、何にても稀醬油にて味つけ、右のいもにて和ものにす。
●（六十八）まろめいも　生にて卸し、蒟蒻の細ぎりに、稀醬油にて味つけ、粒胡椒の二ツ割、廝子三粒を入れて丸め、油煠にするなり。

時　文

◎日本現時の社會問題　田島錦治君　東華堂版

社會問題の聲熾んなる今日に當りて此書出づ。日本維新前後の社會問題を論じて、其附錄は歐米に於ける近世の社會主義論を添ふ。されど附錄とはいへ其方が全部の大部分を占めて、本題は單に緒論に止まる。寧ろ今世社會主義綱領と題せん方當れりといふべし、何ぞ見…

全部の大部分を占めて、本題は單に緒論に止まる。寧ろ今世社會主義綱領と稱せん方當れりといふべし、何は兎もあれ、日本の書籍にて、社會主義を說きたるもの、此書を以て最もよろしとなす、之に志しあるもの、就て覗へば、得る處あらん。

◎裁縫新教授法要書　小出新二郎著　大倉書店版

小出新二郎氏とは、小學校裁縫新教授法の發明者にして、其方法は曾て本誌にも紹介し置きたり。本書は即ち其新案を委細に說述したるものなれば、裁縫教師等之を見て益する處あらん。

◎春陽文庫　第五　春陽堂版

春陽文庫第五收むる處、宮崎三昧の「花寄園香」なり。代言人の惡策、アベスレ園者の手練を筋にしたるもの、櫻痴の大策士と並び讀むべし。

◎各宗高僧ものがたり　春陽堂版

曾て讀賣新聞に連載せられたるものにして、佛門各派の智識の失策談、放埒話また高德談、細大を網離して、頗る面白しといふべし。

◎新小說　第十二號　春陽堂版

「うたゝね」は島崎藤村の、小說に於ける初作なるが、通篇一種の異形を放てるか如きの觀ありて、描き出されたる人物の性格、それ〳〵見るべきあり。新體詩に於ける藤村、今やまた小說に於て妙手腕を振はんとするか。吾人は君によりて、今の寂寥なる小說界をにぎはし、こゝに一靈光を映じ來るあらんとを望むものなり。

「平八郞」織戶礩鼠の外、見るに足らず。

露伴の「家屋」論注意すべき議論なり。

未讀の分◎新著月刊第八號◎列國變局志

◎女學文壇雜俎　十月下半期

◎女學生前途の心得（加藤弘之）　太陽第二十一號
◎女子大學設立の可否如何　同
◎高等女學校設立の大急務（豐美重由）　兵庫縣教育會雜誌第九十八號
◎保姆の任務（岩谷英太郞）　女子の友第九號
◎女教師（高津鍬三郞）　女鑑第百四十三號
◎女權の擴張（雪陽）　婦人新報第六號
◎離婚統計（元田作之進）　大日本婦人教育會雜誌第九十七號
◎女子大學は絕對的に不必要なり（竹內楠三）　日本主義第六號

片々

◎明治二十九年末現在全國各種學校女生徒　女子高等師範學校及高等師範學校附屬音樂學校百七十八人、尋常師範學校女子部八百七十二人、高等女學校四千百五十二人、專門及技藝學校六十六人、徒弟及實業補習學校千七百六十二人、各種學校一万六千九百五十八人、小學校高等科十一万四百四十八人、同尋常科百二十三万四千二百六十一人、通計百三十六万八千六百八十一人、之を二十八年末の總計に比するに、十一万千九百七十三人の增加なり。されど之を

◎同年度　に於ける男生徒の數に比較するに、總數に於ては二分一に過ぎず、高等女學校生徒と尋常中學校生徒とを比較すれば十分の一に過ぎず。

◎また同年度　の調査によれば、學齡女兒百人中就學者、神奈川は六十一八七四、山形縣は四十八八、福岡縣は三十八八九六なり。また明治二十八年度の女子學齡兒童就學者の全國平均數は百人中四十三人なるが、その平均以下の國々は尾張、甲斐、上總、下總、常陸、磐城、岩代、陸中、陸奥、兩羽、越前、越後、佐渡、丹後、但馬、因幡、伯耆、紀伊、淡路、讃岐、伊豫、備後、兩豐、兩肥、日向、大隅、薩摩、對馬、琉球、北海道全躰なり。而して就學の最多なるは讃岐の八十四人一四にして、其尤も少きは沖繩の九人五三なりといふ。

◎福島縣教育會[illegible]知事の諮問に答へて女子就學奬勵策をいふ曰く

第一　女子就學の少きは舊來の習慣として一般に女子教育の必要を感ぜざるに依る故に諸種の方法手段を用ひ女子の教育必要なる所以を說示し之を知らしむべし

第二　從來女子を教育するに男子と同一に取扱ひ男子の教員之を教育せしによ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り方法其宜しきを得ず隨て良好の効果を收むること能はざりしは亦女子就學を少からしむる一因なるべし故に益女教員を養成し之をして專ら女子教育の任に膺らしめ女子の淑德を養ひ其美を感ずるに至らしむべし

第三　法令を勵行し就學督責を嚴にし强制以て就學せしむべし

第四　然れども獨り督責にのみ依るべからず又適當の獎勵法を設けざるべからず依て地方稅の內より每年凡金壹萬圓を支出し女子就學の多少に應じて之を分割補助し以て大に女子就學を獎勵鼓舞するの方法を取らば其効果必ず大なるべし

◎高等女學校尙早　女子大學を尙早しとする論者をさへ可笑しと思へるに、これは秋田縣の某、同地に高等女學校を設立せんは、時機尙早し、今の處には高等小學校にて充分なりといふ。

◎貞女なるか　秋田子爵夫人といひ、また石川縣金澤市參事會員山森某の妻といひ、夫の不品行を諫むるに道なくして、自殺せしもの、世は呼んでこれを貞婦烈女の美談となすと雖も、吾人は之に於て少しく惑ふ。夫れ自ら潔うして、却て夫の醜名を天下に暴露す、豈に貞女といふべけんや。眞の貞女は自らの貞節を他に知られざらんことを欲し、またよく夫の爲に其醜を蔽ふ。彼兩人の如き、志に於ては殊勝なるものありけんも、其行之に叶はずして、たゞ自己を潔うするの私に了る哀れむべし。

◎明治年間の米代　明治元年は一年平均一石六圓（最安價は同三月の平均三圓七十錢）同二三年の交は十圓臺、同五年は一石四圓より三圓五十錢の安直。七年には八圓二十錢、九年より十年に亘りては五圓內外、殊に地方によりては一石二圓臺の處もありたり。十一年には平均六圓六十錢、十二年には平均八圓、十三年十二月は、十二圓五十錢、十六七年の交には一石四圓、十八年には七圓內外、二十一年の七月には四圓七十錢となり、地方によりては一石二圓臺なるもあり。二十三年六月には十二圓臺、二十四年には七圓內外、二十五年より二十六年は七圓乃至八圓、以後漸次に騰貴して今日には十二圓以上となり、一圓につき白米五升內外の未曾有の暴騰となれり。

◎東京の湯代　九十月の交より一錢五厘の蕎麥代一般に二錢に引き上げたるに、また十一月一日よりは、一錢五厘の湯代を二錢に上せたり。

◎三井吳服店の賣上高　三井吳服店當季冬物賣出し三日間の賣上代金を聞くに、初日は五萬九千九百四圓、二日目は二萬七千五百十八圓、三日目二萬二千三百六十圓、總計十萬六千七百八十二圓なり。昨年は八萬五千圓なりしに比すれば、本年は二割九餘の增加なり。諸物價騰貴の今日なれども吳服店が如斯くの盛況を呈するは、これ多くは人民奢侈の度の年一年に進み來れるに因らずんばあらず。

◎流行冬衣の價格　男物上等禮服（上衣、下衣、羽織、胴着、襦袢、帶、袴摘）百八十圓餘、同通常服上等（上衣、下衣、羽織、帶摘）八十五圓、同中等（同上）五十三圓、同下等（同上）三十五圓。女物にて最上等通常服（上衣、下衣、羽織、長襦袢、帶摘）二百十九圓、同上等（上衣、下衣、羽織、帶摘）百十八圓、同中等（同上）六十圓、同下等（同上）三十六圓餘、同禮服模樣物二枚重六十五圓位、同上（二十歲以下）三枚重七十圓乃至九十圓、同上（二十歲以上三十歲）六七十圓、別染濵縮緬黑三枚重、百圓乃至五百圓、同上色物百圓乃至百五十圓なりといふ。

◎山梨縣　の一少女十二歲なるもの、死に臨んで口吟して曰く、「行く先の道は知られど是非もなしたゞあちこちと迷ひ行かばや」と其情切なるものあり。

◎女子教育論纂　女子教育論正に盛んなるを見て、普及舍は二三年以來の、諸名士の女子教育論を一括して之を出版せんとす。

◎教會設立　の女學校の如きは、其經費も外人の手より出て、固より布教の方便に供するものなるべければ、其教科の本邦女子に不適當なるは、論ずるに及ばず云々とは、高津某の說にして、また現今滔々たる所謂教育家の考說なり。外國宣敎師派女學校の、日本教育界に於ける、莫大の効績を蔑視せんとするもの、而も其等學校の情實を盡くさずして、妄言以て之を誹る。蓋し如斯は心あるもの共に耻づる處にして、而して此種の議論をなすものは、皆自ら思へらく、我は國家を愛重するものなり、國體に誠忠なるものなりと。いふをやめよ、盲者の昧言。この如き些細の事情にさへ通ぜざる底の頑癖者流、果してよく何をかせんや。

◎專門的家屋　露伴氏家屋を論じて　今の勞働と安息との爲めに兼用せらるゝ家屋は、家屋其者の本來の性質に非ず。專門的に安息すべき家屋を有するに至りて、家屋と人との關係は十分なる發達を遂げたるものなり。未來に於て若干の長時日を經たる後に、人は一方には安息的家屋を有し、他の一には、職業の爲めの家屋を有するに至るべしといへり。

時　報

◎救恤金下賜　兵庫、德島、愛知、岐阜の四縣下、去月下旬以來、非常の暴風雨の爲め、被害不尠趣憫然に被思召、さる十月十五日、　天皇　皇后兩陛下より、御救恤として、兵庫縣へ金千五百圓、德島縣へ金千二百圓、愛知縣へ金八百圓、岐阜縣へ金七百圓を下賜せられたり。

◎貞宮殿下の御殿新築　過般御降誕あらせられたる、皇女貞宮殿下は、青山御所內の產所御殿より、高輪御殿へ移らせらるゝ筈の處、御都合により、赤坂御所內、舊明宮御殿の跡へ　更に御殿新築あらせらるゝことゝ定りたるやに洩れ承る。

◎貞婦賞杯を受く

山形縣羽前國東置賜郡大塚村
大字四大塚金子熊太妻　しゆん

資性温良舅姑に事へて孝、夫に事へて貞、舅の悪疫に罹るや姑と心を合せ養護周到其道を盡すを以て全癒の効を速かならしむ夫病みて全身不隨の症に陥り言語通ぜざるや筆談善く其意を通じ以て病苦鬱悶の情を慰む其他看護非常の艱辛を嘗むるも毫も倦厭の色なく星霜を經る事爰に五年洵に奇特とす依て其賞として木盃一個下賜候事

明治三十年十月十四日　山形縣知事正五位　菊地九郎

◎孝子賞與　茨城縣結城郡中結城村平民幸田清吉は、去る明治十七年以來父母交々疾病に罹り身體自由ならず、家素より赤貧なるを以て醫療も亦充分に受くる事能はず、然るに清吉は他家に傭はれ其主の爲めに業を執るを以て晝間は家居看護すると叶はざるも夜間に至れば傭主の許諾を得て家に歸り河沼に漁して魚を捕獲し之を父母の食膳に供し或は鬻きて金に換へて米價及食料に充つる等、十年一日の如く孝養を怠らざるは、洵に奇特の行爲なりとし此程同縣廳より其賞として金五圓下賜せられたり。(茨城日日新聞)

◎夫婦共に孝　山口縣佐波郡牟禮村字東山第六百七十五番屋敷農水尻兵右衛門(四十一)と云へるは、天性篤實にして、今年七十四なる老母チカに孝を盡し、我家の農業は勿論、暇あれば他人の日傭に雇はれ、身を粉に碎きて働らき、一意母に奉ずるうち、近來母は取る年齢と身體衰弱し且つ兩眼も薄くなりたるより、兵右衛門は一際孝養を勵み、之に連添ふ女房も能夫の意を體して苟にも母を粗末にせしことなく、夫婦打揃ふて朝夕の孝養を篤くし、如し母が寺參り其他の用事あり、又保養の爲めに外出の時は、兵右衛門自ら母を負ひて路の遠きを厭はず、又母に薦むる平素の食物は特に注意して新鮮ならざれば奉せず。居宅も清潔にして母の衛生に適するやうにし、又稼業の休みには、夫婦代る〳〵老母の氣を慰むるため、四方山の物語りをなし、嬉しき母の顔色を見るを此上なき樂みとし居れり、斯る心掛なれば村内の人に接するにも信切にして、我居村の里道に破損せし箇所等あるときは、竊に之を修繕して、通行人の便利を與ふる等、善行枚擧に遑あらぬほどなれば、村長も大に感じて其筋へ具申したりといへば、近日賞與の沙汰あるべしとなり。(中央新聞)

◎錦楓女史の名譽　尾張國海東郡萬須田村の前田錦楓女史は畫家として、美術家として、人の知る所なるが、今回巴里萬國大博覧會へ出品すべき、我政府の出品製作資料に供する爲め、美術工藝品の圖案を募集するや、全國の美術家競ふて意匠を凝らし、應募せしもの百三十五名、出品圖案二百四十八點、而も其中優等案として、夫々賞金を與へられしもの僅に十三點、此出品者九名中に、婦人は唯一名なりき、而して其一人は錦楓女史にして、圖案は織洗朱塗、浦千鳥繪書棚なりと。

◎女子高等師範學校規程　明治三十年十月十二日文部省令第二十四號を以て、女子高等師範學校規程を發布せらる左の如し。

女子高等師範學校校規程

第一條　女子高等師範學校の學科を分ちて、文科、理科とす

第二條　文科の科目は、倫理、教育學、國語、漢文、外國語、歷史、地理、家事、體操とす

前項科目の外、習字、圖畫、音樂を隨意科とす

第三條　理科の科目は、倫理、教育學、國語、外國語、地學、數學、物理、博物、化學、家事、圖畫、體操とす

前項科目の外、習字、音樂を隨意科とす

第四條　女子高等師範學校の學科は師範學校女子部の課程に照し更に一層精深なる程度に於て教授するものとす

第五條　修業年限は四箇年とす

第六條　第四年級生徒は附屬學校及幼稚園に於て實地授業及保育に從事せしむ

第七條　生徒在中自己の便宜に因り退學を願ふ者は支給せられたる學費を償還すべし」文部大臣は其の情狀に依り前項償還すべき學費の全部又は免除することあるべし

第八條　生徒在學中疾病に罹り若くは學業進ます又は品行修まらさるか爲に成業に適せすと認むるときは學校長より退學を命すべし

品行修まらざる爲に退學を命ぜられたる者は支給せられたる學費を償還すべし

第九條　相當の學力を有し師範學校女子部及高等女學校の教員たらんとするの目的を以て教育學及教授法を專修せんとする者の爲に研究を設くることを得

研究生の在學年限は二箇年以下とす

第十條　師範學校女子部及高等女學校教員の缺乏を充たす爲に特別の必要ある場合に於ては專習科を置くことを得

專修科の學科目及其の程度並に修業年限、募集人員、入學者資格等は其都度文部大臣の認可を經て學校長之を定む

第十一條　師範學校女子部又は高等女學校教員たるの志望を有する者にして文科又は理科中の一科目若くは數科目を撰びて學修せしめんとする者は撰科生として入學せしむることを得

撰科生は何等の科目を撰ぶに拘らず教育學を兼修することを要す

撰科生在學年限は二ヶ年以上四箇年とす。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なほ此外に同月同日文部省令第二十二號を以て女子高等師範學校募集規則を定められたり。

◎貞婦受賞　香川縣三野郡本山村高木瀧治妻秋山ケイ女は、貞節の故を以て此程德久同縣知事より、左の通り賞せられたり

三野郡本山村高木瀧治妻
秋山けい

常に舅姑に事へて孝を致し夫に對して貞操を盡す明治廿五年夫眼疾を患ひ辱に就くや專ら藥餌を供し針灸を薦め只管治療の途を盡くせしも不幸遂に癒えず同廿九年に至り全く明を失せしのみならず又中風に罹り半身半隨となり家計益々窮乏に陷りけい此間に處し毫も屈撓せず幼兒を脊にして晝夜力役に服し其得る所を以て醫藥及日常の諸費を辨じ他人の補助に賴らず婦人の身を以て一家數口の生計を支持し能く舅姑を慰め病夫を看護す其志行堅實克く久しきの艱難に耐へ更に渝ることなし洵に奇特の至りとす依て其賞として金五圓下賜す

◎感ずべき少女　備前上道郡財村山田新治の次女某は、小學校授業料を其父母より貰受るを氣の毒に思ひ、自ら編笠を製し其賃金を以て之を辨じ、而も每試驗には優等賞を得るといふ。

◎幼稚園敎育に關する取締　文部省にては近々幼稚園保育規定を發布し、兒童敎育に關する取締をなす由にて目下夫れ〳〵取調中との事なり、其理由を聞くに目下全國に現立せる幼稚園は、二百餘の多數に達し居れ共、或る者は幼稚園を以て小學校の豫備科視し、滿六歲以下の者に數學讀書を敎授する者あり、斯くては兒童の敎育上尠からざる大险害あるに依り六歲未滿の兒童には一切之を禁止し單に紙の折方笽木の並へ方等の如き、兒童的保育にのみ限る事となし、尙其管理上に關して規定する所ある筈なりと。

◎老孝子、老貞女　福岡縣下鞍方郡直方町山田新氏は本年五十九歲、天性親に事へて至孝事遂に官に聞へ、本年十月八日、同縣知事より其賞として金五圓下賜せられたり。又茨城縣新治郡の農民山田幾助の妻リウ、は本年七十五歲、昨年夫僟助病死に至るまで、之に事へて至貞、よりて又官之を賞せり。

◎一大貧民學校設立の計畫　大倉喜八郎氏は此回、基本五十万圓を以て一大貧民學校を創立せんとし、自ら先づ十五万圓を出金し、他にも有力なる寄附者を募集する筈にて、平沼專藏氏また之に出金を爲したりといひ、伊藤侯大に之を贊すとの事一日も速に實行せられんことを望、如斯きは暴富者、其富を致したるの故を以て貧者に報ずるの一良策なり。

◎三重縣高等女學校設立の議　三重縣にては、明年度より一高等女學校を設立するの議ありて、其豫算案を、本年の縣會に提出する由。全縣には兼て津市女學校とて附屬幼稚園をも有せるものあり。此學校の規摸を擴張して縣立となさんとの說あり。

◎各府縣に高等女學校を設立するの建議案　去月二十三日より三日間帝國敎育會講堂内に於て開かれたる全國聯合敎育大會にては、兼て其豫定議題中には、一も女子敎育に關するものなかりしが、香川縣岡内菜氏が、府縣に高等女學校を設立すべし、但市町村又は私立の學校にして代用するに足るものあるときは設置せざるを得との建議案は大多數の贊成を以て可決せられ、且つ之を文部省へ建議する事に決したりといふ。

◎市立大阪高等女學校移轉の議　市立大阪高等女學校は、昨冬以來敎室狹隘の爲新規の入學を謝絕し居りしが、今回は府立尋常師範學校を、天王寺村附近に移すの議あるを幸ひ、同校移轉の上は、其跡に引移らんとの計畫ありて右議案を今期の議會に呈出せんとす。

◎大日本婦人義勇會の事業　は此程の集合にて左の通り決定したりといふ。婦女子に適切なる體育を敎授し以て體格の完全を期すべき事○外傷患者の急救所を設立し赤十字事業の補助をなす事○姙婦及び辱中婦女子の心得を敎授する事○外傷より誘引する諸種の關節病の診察をなす事○大和軍人倶樂部を全國各地に設立し武人の利便に供し併せて恤兵事業を助くべき事○本會の事業を一般に廣めんが爲め定期の婦女雜誌を發行すべき事なほ、同會は有位有爵者を總裁に仰ぐの豫定なり。現今の役員は幹事女醫首唱者松本愛子、評議員伯爵夫人板垣絹子、米公使星亨夫人星都奈子、島海小學校主島海秀子、子爵夫人交野粲子、中江篤介夫人中江彌子、野中千代子、代議士山田泰造夫人山田光子なりといふ。

◎海外女界

◎瑞西の女醫　瑞西には、現在三十五人乃至四十人の女醫あり。此等の女醫は、此程一の組合會を組織したるが、如斯は歐洲未聞の出來事なるべし。

◎米國テンチシー州ナシユヴイル市　の主なる三新聞紙はいづれも婦人の通信員を使用せり。

◎ルデー、スチール孃　といへるは、此程米國ケンタツキー州の學校試驗委員の一人に撰ばれたり。孃本年二十二歲。

◎メンデルゾーン奬學金　伯林府にて競爭試驗の上授與するメンダルゾーンの奬學金とて、音樂修業者の爲めに設けられしものにして、之を獲んとして競爭する者頗る多きものなるが、右は今回は、米國の一女子レノラ、ジヤクソン孃之を獲たり。其奬學金額は千五百マルクなりといふ。

◎瑞西の女子家事經濟敎授に關する件　瑞西の共益婦人會は、各州政廳に書を寄せて、小學校の最上級の女生徒又は女子溫習學校生徒に、家事經濟に關する理論を實際上の敎授を强制施行せんことを請願せり。其方法は敎授期限を五ケ月とし、一週二回晚食後に之を敎授することゝなし、其經費は生徒一人に、八フラン乃至十フラン宛にて足るの豫算なり。

◎露國に於ける女子醫學校　近來露國にては人民の何れの階級内にも婦人醫の必要を感ずる者多く、又婦人中にても種々の專門學士を出すを以て聖彼得堡府にては特に女子の專門醫學校を設けたる由にて過般學生を募集して、羅典語其他の普通學の入學試驗を執行したるよし。

十一月二十日刊行分より社會雜誌に日本宗教を合併し紙數を一
增加し材料を精撰して改……

十一月二十日刊行分より社會雜誌に日本宗教を合併し紙數を增加し材料を精撰して政治社會宗教經濟及文學等に涉り大に紙面の刷新を行ふべし定價は從前の通りにて社會雜誌社より發行す此旨日本宗教及び社會雜誌の購讀諸君並びに江湖諸彥に告ぐ二者合併改良後の紙面か如何に光彩を放つかを撿せよ

社會學社會問題及社會政策の評論

社會雜誌

每月一回發兌
十月刊行第六號要目

◎勞働者保護と勞働者保險……社說
◎臺灣總督の人撰……仝
◎根本的改革○巧痴と拙實……仝
◎經世家着眼一轉の機……山形東根
社會政策の講究と海外貿易の奬勵
◎産業組合論……片山潛
◎職工衞生調査資料
(一)東京砲兵工廠の部(二)大阪紡績工塲の部(三)勞働病疾保護法案
◎工塲條例の趨勢(數十種の時論運動を許す)
(一)工塲條例と職工條例(二)其進行(三)之に對する當業者の運動(四)飜譯條例は好ましからず(五)制定の必要と反對說(六、七)制定に就ての希望(八)議會の決議奈何(九)吾人の意見
◎婦人社會の硏究◎勞働所の來歷及政況○貧落狀態の傾向(五月來の形勢)○彙報は如例豐富なり

定價一冊十錢郵稅五厘半年分前金六十錢

東京麴町區下六番町六番地

發賣所　社會雜誌發賣所

訂正再版

東久世伯題辭
依田學海先生序文
青外井原豐作先生編
近世文體の熟語字彙

學生寶藏　美文良材　袖珍美本

正價貳拾錢郵稅四錢
發賣元
東京堂
東京神田表神保町

關西發賣　大阪備後町　吉岡平助

扇拍子

三遊亭圓朝
三遊亭圓遊
三遊亭圓右
講演

扇拍子　全壹冊　頗美本
正價金貳拾五錢　郵稅四錢
發賣元　東京神田區表神保町　東京堂

女學雜誌一手大賣捌
東京神田區表神保町
東京堂

統計集誌

毎月廿五日發兌
定價金二十五錢

第百九十六號目次（三十年十月廿五日）

農業信用銀行（前號ノ續）……小笠原金三郎
本邦民刑事統計ニ就テ……秋田稔
大日本國勢問答（十三）……河合利安
統計雜話（第廿二回）……横山雅男
露國千八百九十七年ノ人口調……伊東祐轂
天氣豫報及暴風警報適否三箇年比較……武市翁壽
帝國森林原野統計（承前）……白浦漁夫
世界開闢以來金產額……伊東祐轂
横濱港輸出入（明治三十年八月）……横濱稅關
明治廿八年度內國稅徵集費現計額ノ二……關三吉郎
諸稅負擔額（明治二十七年度）……篠崎亮
整理公債發行ノ結果（前號ノ續）……細川雄二郎
雜記……
●東京統計協會定會期及臨時總會●東京統計協會常議員會●東京統計協會定期會●東京統計協會入會者●寄贈書目●伊藤侯の演說

發行所　東京市京橋區山城町六番地　東京統計協會

進步黨々報

第十三號（十一月一日發行）定價一册七錢◎毎月二回（一日十五日）◎六册（三ヶ月分）前金四十錢◎十二册（六ヶ月分）仝七十八錢◎二十四册（一ヶ年分）一圓五十錢◎不要郵稅

論說

◎進步黨立脚地……竹內正志
◎銀行の手形割引不振の原因及救治策……天野爲之

政務資料

◎萬國工業財產保護同盟條約の來歷及び要領

寄書

◎營業稅法改正案（上）……田口卯吉
◎星公使に與ふ（下）……在米　梅田又次郎

評論

◎雜誌界の近今　◎元勳網羅と內閣改造◎前松方內閣と現松方內閣◎高野問題は政治的問題なり◎先つ之に餘裕を與へよ◎怠慢無能か◎世界の一致◎圓銀及兌換券の引換高幾何に達すべきや●新著批評（沛鹽斯德○護國經現世篇○金貨本位之日本○諸雜誌）●價を以て買ふべし

雜錄

◎英國政治家論評（二）●詩二首（天樂居士）歌三首（天山居士、佐瀬熊鐵）
●官吏に對する毀譽褒貶

外報

◎大韓皇帝陛下　◎露國深謀露見◎獨墺兩帝の會合◎海獸保護會議問題◎西班牙新政府と玖馬島◎印度征討軍の克捷◎西部亞非利加と英佛兩國◎英國に於ける複本位問題◎西班牙の石油賣買◎淸國外債應募の證金

經濟事情

◎三十一年度豫算及歲入不足補塡策◎九月中の外國貿易其他

黨報

時事

發行所　東京麴町區內幸町一丁目三番地　進步黨々報局

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治女學校義捐金

第十一回報告

金十圓也　山梨縣　野口英夫殿
金十圓也　同　金丸宗之助殿
金十圓也　同　三神俊三殿
金十圓也　同　田中治左衞門殿
金十圓也　同　鶴田新左衞門殿
金十圓也　同　寺田喜平治殿
金十圓也　同　荻原光太郎殿
金十圓也　同　黑川雲登殿
金十圓也　同　大木喬命殿
金十圓也　同　風間伊七殿
金十圓也　同　廣瀬久政殿
金十圓也　同　志村勘兵衞殿
金五圓也　同　清水有文妻殿
金五圓也　同　風間銓二郎妻殿

移轉廣告

本社今般都合により
東京巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
に移轉仕候間此段廣告仕候也
右に付本社への御用向の方は同所宛にて御差出し被下度また自今雜誌及び書籍代金御拂込みの節は
東京駒込郵便支局
宛にて爲替御取組み被下度候
明治三十年十一月

女學雜誌社

卜居　東京麹町區下六番町六番地　櫻井彦一郎（鷗村）

●女學雜誌編輯上の用向並に雜誌及書籍等寄贈の節
●は右櫻井宛に御差出し被下度候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可